
このハーレム男がっ！！！

雲間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「」のハーレム男がつ！！！

【Zコード】

Z9166T

【作者名】

雲間

【あらすじ】

「あなたのことが好きです。愛しています。あなたの何もかもが美しく愛らしい。どうか、この私と結婚してくれませんか？」

「……だ、誰が初対面のあんたとするか」ノヤロオオオオオオオオ
！――

学校行っていたと思つたら、突然神殿っぽいところに。田の前にはイケメンがいて、いきなり求婚してきました……。ええと、頭大丈夫ですか？ 妙なところをツツコニまくるのんきな女の子、ハーレムにならざるおえなかつた勇者とのドタバタコメディ？ シンデ

レヤンデレ男前猫かぶりやらハーレム集団が濃いです。

「あなたのことが好きです。愛しています。あなたの何かもが美しく愛らしい。どうか、この私と結婚してくれませんか」

「……だ、誰が初対面のあなたとするか」ノヤロオオオオオオオオ

「……」

私、鹿島 美夜。ピチピチ……の16歳。何故か初対面の金髪青目の一二次元にいそうな、典型的イケメンに求婚されました。何故ですか。

ことの始まりってなんだつたんでしょうか。私にはさっぱり分かりません。

私は普通に学校に登校していた只の高校1年生です。特に何か取り柄があるってわけでもありません。

そんな普通な私が、いきなり光に包まれたかと思うと、なんか大層神秘的な神殿にいたんですよ。しかも、祭壇っぽい一段高いところに。多分神殿の奥に位置してるんじゃないでしょうか。私とは正反対の場所に扉があります。

神殿とかひええええじやないですか、なんですか。目の前には、お前アニメから出てきた人だろつてくらいの、綺麗な顔に引き締まつた体、宝石いれてんだろと聞いたくなる輝きをした瞳、髪の毛は金の輝きを放っている人がいた。

着てる服は青で纏められた、明らかに上質な布を使ってる剣士様つて格好。赤いマントと伝説の剣としか思えないの付き。

……見惚れないわけがないじゃないですか。

漫画から飛び出してきました！　ああ、納得！　で終わらせられる美貌ですよ？　見惚れないなんて無理です。

あれですよ、美しい絵を鑑賞している気分です。んでぼけーっと見つめてたんですよ。そしたら冒頭に戻るつて訳です。

いやあね、いくら美形だからってやつていい事と悪い事はありますよ？　分かります？　私とこの人、初対面ですかね？　私見覚えなんかありませんよ？

考えてみてくださいよ、日本で育った普通の学生が、外人と出会うのさえ、そんなにないんです。

会つてたら覚えてますよ、こんな美形。だから会つてたとかそういう線はなしです！

「突然お呼び出しして申し訳ありません。しかし、私はあなたに会いたかった」

「…………は？　いや、だから初対面ですかね？」

…………本当になんですか、この人。電波か、電波なのか！？
美形で電波とか残念なイケメンだな！！　妙に恍惚としながら話していくし…………。

美形イコール何処か残念つていう法則なんですかね？

「はい、確かに私とあなたは初対面です」
「あ、よかつた。そうですよね」

少なくともメルヘンな頭ではなかつたらしい。そこはよかつたといふかなんというか……。いや、まだ何の問題の解決にはなつてないんですけどね！？

なに初対面でいきなり求婚してきてるんだって話ですよーー！

「申し遅れました。私の名前はハルトムート・シュレイヴォーンと申します。美しい人、あなたのお名前は？」

「'ハルトムート'、美しくないですよ！『ええっと、しゅ、しゅれば、……ハルトムート、さん？』と比べたら天と地の差つてやつですよ！……何を言つているんですかあなたは……！」

苗字長くて言いつらいよ！！名前で呼ぶしかないじゃない！！後、私より綺麗な人はなんぼでもいるでしょうに……それに、私は普通の顔であつて、美しくも可愛くもない顔ですよ！自他共に平均的な日本人顔ですもの！

「……とか私より綺麗なあんたには言われたくない言葉です！！ええ！！」

「……って、なに顔赤く染めてるんですか！！」

イケメンがそんなことしたら、なんか可愛い……じゃなくて……

「い、いえ、あなたに名前を呼んで頂けたのが嬉しく……」「そ、そなことで嬉しくならないでください……」

「うあああああ、なんなのこのイケメン………初々しいにも程がありますよ！ やっぱかわい……げふげふ。そうじゃない、そうじゃないわ美夜。

「今の問題はそこじゃないでしょ！」「何度言えば分かるのかしら
美夜！」

「ちょ、ちょっと待つてください、ハルトムートさん。のですね、私達、初対面ですよね。なのにいきなり結婚だじうの言われても困るわけですよ」

「……すみません。冷静に考えれば、あなたの仰る通りです」

申し訳なさそうな表情をして、私に謝つてくれる。わ、分かればいいんですよ、分かれば！

あぶふぶふぶぶぶ……、こんなイケメンに謝られるのはなんか、うん、逆にこっちが申し訳なくなつてくるわ……。

「あなたをお呼び立てしたのは、私の真に愛せる人を見つける為なのです」

「…………はい？」

その後、色々事情を話してもうつた。ハルトムートさんの話を要約するところ。

まず、ハルトムートさんの職業（？）は勇者。や、確かに勇者と言わればそれっぽいです。それが王国の騎士様って感じですし！元々、ラムフォオっていう神様から信託があつて、ハルトムートさんが勇者であることが予言されてたらしい。それで、小さい頃から勇者としての訓練うんぬんかんぬんをやってたとか。

神様いるんですか……。流石異世界つてやつですね。ああ！ こひ、地球じゃなくて『ラムフォーラース』つていう世界らしいです。神様の名前からまんまとつてるのか……。適当な。

まあ、異世界とかじやなかつたら、私がいきなりこんなとこにうか来た説明がつかないといつか……。つと、話し戻しますね。

んで、勇者として魔王を倒しに行つて見事倒したんだそうです！いやー、すごいですよね！ 流石勇者様つてやつです。かつこいい！ あ、いや、だから照れないで下さい。ハルトムートさん絶対褒め慣れてるでしょうに！――

……おほん。見事世界を救つたハルトムートさんは、子供のない王様の養子になることになり、いざれは王位をつぐそうな……。ひえええ、ていうことは今は王子様！？　おおお、恐多一……。

「」からが本題だそうな。いざれは王位を継ぐことになるハルトムートさん。となると、結婚話が出てくるわけ……。あまたの求婚がきたらしいです。当然ですよねー。

ハルトムートさんはかつこいいし勇者だし王様になるわけだし、超優良物件だから肉食な乙女たちが放つておかない。

選り取り見取りじゃないですか……。くつ、羨ましい！　憎いね色男！　と、普通は思いますよね。ところが、ハルトムートさんの場合はそもそもいかないそうで。

この『ラムフォラース』での勇者はある意味特別なんだそうです。勇者となる代償に、呪いがかかる。

男にとつては夢！　一部の女にとつても夢！　な『絶対ハーレム』の呪いが必ずかかるそうな……。うわあ、羨ましい……。美女や美少女幼女はべらせ放題つて……！！

と・こ・ろ・が！　当の本人には迷惑でしかないだとか。『絶対ハーレム』の呪いは、この世界の人で愛する人を見つけることはできない、という呪いも含まれているそなんですよ！！

そのせいで歴代勇者様は結婚もせず、独身で一生を終えてしまつた人ばかり。うつわあ……。世界を救つたのにそれつて、不憫すぎるでしょう！！

ハルトムートさんも例にもれず、『絶対ハーレム』の呪いのせいで、愛する人は見つからない。けど、王となる以上はそうはいかないんですよね。跡継ぎ問題とかありますし。

なら王になるなつて話ですが、『絶対ハーレム』の呪いについては、勇者以外、知ることがないとか……。知られても、んなわけないでしょ、つてとりもつてくれない。不憫……！

『Jのなつてしまつた以上は、どうにかしなくてや いけないわけで。そこで私の出番なんだそうです。

『Jの世界の人で』 愛する人を見つけられないのならば、『違つ世界の人』を呼び出せばいい。

そんなわけで、ハルトムートさんが使える呪喚魔法で私を呼び出したそ……。

「……って、そんな理由で私を呼び出したんですか——！？」

ななななな、なんですかそれは！ 私の人权まるつきり無視じやないですか！！ 確かにハルトムートさん達からすれば大問題なんでしょうけど、Jのちも大問題ですかね！？

なーんで私が見ず知らずのハルトムートさんと結婚しなくちゃいけないんですか！！ めったにお目にかかる幸運だとは思いますが！

私には地球での生活つてのがあつたんですよ！？ 鹿島 美夜、人权を主張します！！

「……本当に申し訳ないとは思つております。しかし、私には諦めきれなかつた。私の幼き頃からの夢を……」

「夢？」

打倒魔王！－ とかじやなくてですか？ あ、もう終わつたんでしたっけ？

「私に呪いがあると知つたその日から、叶わないと知れどもずっと想い続けました。私が愛する人を得ることを。成長するにつれ、想

いが抑えきれなくなりまして、私は冒険の傍ら異世界への扉を開くために召喚魔法を開発したのです」

そ、そんな切なそうな顔して訴えないでください……！…「うかりあなたに同情して流されそうになっちゃうじゃないですか！だ、騙されませんからね！ 傷げな表情しても許せませんから！私の人生まる」とパアになっちゃったんですからね！？」

「成功するかどうか、定かではありませんでした。もしこれで失敗するようでしたら、諦めて政略結婚しようと思つていたのです。ですが、私は幸運にも、貴方と出会つことができた。……これが、愛というものなのでしょうね。あなたのことを、ずっと見ていきたい。あなたと、一時も離れたくないと思うのです」

誰もが惱殺される笑みを浮かべながら、私の手をとつてく、くち、口付けし、し、した！… ギヤああああああああなんですかこの騎士の誓いみたいのは…！

ははははは恥ずかしいです！ もう無理！ 顔が熱くてしうがないんですけど…！ 誰か助けてええええええええ…！

「ハルトムート！ この私がおりながら、どうこうことありますか？」

「ハルトムート… あたしのことを忘れようつて魂胆かいつ！？」

「…ハルトムート、なにをしているのですか」

「ハルトムートさまー！ わたしが来たんですよー！ ちゃんと出迎えしてくれなきやー！」

「ハルトムート殿、おんじはまた、けつたいなことをしでかしたようじやな」

助けを求めて扉から現れたのは、それはもう色々と厄介な方々で

し
た
。

「ハルトムートーー。私と共にいて下されると言つたのは嘘だったのですか！？」

「メルフィナ様。あれば安定しない国を安泰させるため、共に国へ尽力を注じうと、申しただけなのですが……」

いかにも貴族のお嬢様つて感じの、金髪縦ロールに豪盛な桃色のピンクのドレスを着た女性、メルフィナさん。ちょっと潤んだオレンジ色の瞳がなんというか……、かわいい。小悪魔ですね。

もつと悪魔なのはハルトムートさんですけどね！　それは告白にしか聞こえないですよ。勘違いしない方がおかしいです。ていうかいい加減手、手を、手を離して下せー……！

「あんたに負けた時、ビビッときたんだ……。このアディイラ様にはあんたしかいなってね。だからどこの馬の骨ともしらない女に、あんたはやれないよ！」

鋭い視線で私を睨むのは、女丈夫の女戦士といった風貌のアディラさん。赤く燃えるようなボーネーテールにした髪の毛と瞳が、アディラさんの格好良さをプラスしてる。おねえさま、いえ、姐さんって呼んでもいいですか。姐さんなら私そっちの道にいつちやいそうです。

あの、さつきより手を掴んでいる力強くなつてないですかハルトムートさん。地味に痛いです。離してくださいと言つてているでしょうに……！

「今まで貴方が研究していたのはその方を呼ぶ為ですか。……こんなに近くに私がいるのにそれを貴方はいつまでもいつまでもそうやつて私のことを見ないで他人ばかり見てこんなに私が近くしているのにどうして貴方は気がつかないんですかそうやって私の気をひこうという意図なのですか分かりません私はこんなにも貴方の役に立つとしているのにおあもしかして役に立つていなかからそういうことをしようとするのですね私が至らないから貴方に相応しくないから使えないからだから貴方はその」

「マビア、君は十分役に立つている。事実、私は幾度も貴方に助けられた。そう自分を卑下するのはお止めなさい」

黒の三角帽子に、黒いローブ、紅紫の髪に田の魔女っ子マビアさん。や、ヤンデレってませんか……？ 田が若干……いえ、相当逝つてます。しかしヤンデレまで惹きつけるだなんて、流石ハーレム補正。

……だから離して下さいと何度も言えば分かるのですかハルトムートさん！ ずっと繋いだまま恥ずかしいんですってば！

「ハルトムートさま！ リーリナのこと、忘れちゃったんですねかあ？ わたし、ハルトムートさまのお嫁さんになりたいなあ～って、何度も言つたじゃないですかあ～。こんな乙女が誘惑してゐるのにひどい～～！」

「リーリナ様には婚約者がいらっしゃいます。私のような者に、そのようなお言葉をかけられるのは、おやめ下さこ」

それを自分で言つちやあお終いですよ、リーリナさん。ロリッロリな白のドレスにかかる珊瑚色の髪の毛、丸いワインレッドの瞳。所謂カワいい系。可愛いには可愛いんですけど、自分で言つち

や駄目ですよ、ええ。ていうか婚約者いるのにハルトムートさん口説いてるんですか……！」

「ですからね！ 嫉妬の目が恐怖でしかないのでは離していただきたいんですよ、ハルトムートさん！」

「ほつほつ、これまた随分とおかしな娘を選んだの、ハルトムート殿。だがの、わらわは負けんぞー！」

見た目は子供、頭脳は大人！ その名もめいた……「ほほほほほ。その名も……って、名前が分からん。ハルトムートさん、この子供なようで子供じゃないヨーロッパの巫女さんっぽいお方は、なんと「お名前なんでしょうか。薄めの金髪に金の瞳が神々しくてたまらないです。教えてくれたら、手、もうこのまんまでいいです、諦めます……。意外と強情さんですね、ハルトムートさん。

ふむふむ……ロルシャーハちゃん、じゃなくて、ロルシャーハさん？」

「ロルシャーハでよいぞ、恋敵殿」

「ここここ恋敵ってなんですか！ わ、私、ハルトムートさんが好きとか言ってないですよ！？」

「あなたにハルトムートが求婚している時点では恋敵には変わりありませんわ！」

「ど、どうしてそうなるんですか！ 大体、まだ初対面で、ハルトムートさんのこと全然知らないのに、好きになるとか……ないですか。一田惚れとかもしてませんからね！」

半泣きになりつつ否定してると、握られていた手に、ハルトムートさんのもう片方の手が追加される。なにしてんですかって思つて、ハルトムートさんを見ると。

「……あの、露骨に残念がらないでくれませんか、ハルトムートさん。残念がつてゐる様も非常に美しいとは思ひますが、田に毒です。私の身がもたないんですよ」

「私を田に入れると、貴方は亡くなられてしまうのですか？……？」

「ピッシャーン！ 雷が落ちましたっ！ つて表情で私を見てくる。いやいやいやいや、どうしてそうなるんですか。真に受けないでください」と、ほんのジョークですよ、ジョーク。

「あなたが亡くなられるのは、私にとって一番辛いことなりましょつ。……私はあなたの視界に入らぬようになります。よつやく見つけた愛する人を、失いたくはありません」

「じょ、ジョークですってば！ 冗談！ ハルトムートさんを見るくらいで私は死にはしません！ ただドキドキしちゃうだけです！」
「まあ、同意できますわあ。ハルトムートさまを見ると、ドキドキがとまりませんものお」

リーリナさん、それは恋のドキドキで、私のドキドキは大物を前にする時の、緊張するドキドキなんですよ。同じではありません、ええ。断じて違います。

だからハルトムートさんは顔を赤くしないでください……。どんだけウブなんですか。私も、あなたのことがっこじやなくて、可愛いとしか認識できなくなつてきましたよ。

「どうしてハルトムートに好意を持つていないと、このにあなたが選ばれるのですか一番ハルトムートを愛しているのは私だというのに生まれてからずっと私はハルトムートのために生きてきたそれ以外の為に私は生きたことはない私の全てはハルトムートのもの全て

捧げたのにどうしてこんな女を選ぶのですか理解出来ない理解出来ない私の愛が足りなかつたからそっちに心が行つてしまつたのですね私があまりにも弱いから心もとないから美しくないから可愛くないから隣に立たせられるほど面じゃないから権力ないから気持ち悪いか

「マビア！ 自分を貶めるのもいい加減になさい」

ヤンデレヤンデレ言つてたけど、実際にいるどめんごくさい人なんですね……。ハルトムートさんが苦い表情で辟易してる。少し意外。てつきり軽くいなす人かと思ってたんですけど。勇者様も、色々と苦労なさつているんですね……。勇者つていうと、なんでもできる完璧超人つていうイメージですし。

「ぐたぐた行つてないで勝負だよ、恋敵さん！ あたしに勝つたら潔く諦めてやる。但し、負けた時はどこかに消えてもらおうじやないか」

勇ましいです姐さん。そんじょそちらの男より男らしくつて素敵です。ああ、私はアディラさんの嫁になりたい……。でも、勝負つてなんですか。私アディラさんのような、戦う力なんて一ミリもないんですけど……。戦つたとしても、一発KOです。

「アディラ殿、それはちと厳しい物があるの。恋敵殿は見たところ、何も力を持つていなにようじやからな」

巫女さんパワーで分かるのですか。まあ、確かに私は平々凡々な人生と体ですけど。特になにがあるわけでもない普通の人間つてことで通つてますし。……平凡オーラでもでているんですかね。

「あ、その前に、恋敵、恋敵つて呼ぶのやめてくれませんか……？」

私、鹿島 美夜つて、この名前があるので。あ、いつで、このと、
ミヤ・カシマですね」

「ミヤ、と仰るのですか？ 神秘的で可憐な名前です。貴方にこそ
相応しい名だ」

「ほ、褒め殺したつてそつはいきませんからね！－！ なにもなりま
せんからね！－！」

輝かしい笑顔を私に向けるハルトムートさん。 も、もうイケメン
過剰攝取で私は死ぬ、死にます……！－ ドキがムネムネ！ あ、
胸がドキドキ！ こっちが恥ずかしくて死にそうです！ 繋いでる
手も熱くてしようがないんですけど……！－！

「では、どうやって決着をつけますの？ いい機会ですし、私とし
てもさつさとの状態を終わらせて、ハルトムートと一緒にで
過ごしたいですわ」

ハーレム状態を、ですか。 そうですよね、王となる以上はお嫁さ
ん決めなくちゃいけませんし。 それ以前に、私のような不審者を迎
えて大丈夫だつたんですかハルトムートさん。 貴族とか王族とかは、
身分をかなり気にするんじやありませんでしたつけ？ ……無計画？

「……そーだねえ、公平じゃないと駄目だから、アザレの花を見つ
ける、ってのはどうだい？」

「アザレの花？」
「私が説明します、ミヤ」

ハルトムートさんの説明によると、ピノーリアの花畑に、一本し
か咲かない花らしい。 摘みると、また一本だけ咲くという。 花畑
自体、広さが半端じゃなくて、さがすのは困難極まりないとか。

「そ、そんな一本しか咲いてないんじゃ、見つけるの無理なのでは……？」

「それくらいの価値が～、ハルトムートさまにはありますからあ～」

のほほんと答えるリーリナさん。むむむむ……駄目ですね、この人嫌です。価値ってなんですか、価値って……！ ハルトムートさんは人なんですからね！ あーもー！ もやもやする！

するとハルトムートさんが、ちょっと苦笑いをしながら私を見た。

「……怒つてくださるのですか？」

「当たり前じゃないですか！ ハルトムートさんは人ですよ？ この国がどうだか分かりませんけど、人間はすべからく人権があるべきなんです！」

間違つてるかもしれないけど、私はそう思つんですね。日本だけの考え方だつてのも分かつてゐるけど、許せないんですよ。それが私にとっての当然ですから。

「……やはり、あなたを好きになつてよかつた。心の底から、そう思ひます」

「ななななななな何言つてるんですか！！ やめてください！」

嫉妬の目が怖いんですつてば～……！ ほら！ 今も！ メルフィナさんとアティラさんとマビアさんの視線がががががが。

「ほれほれ、決着を着けるのであるづ～、はよつ移動せぬと、日が暮れてしまつぞ」

「そうですわね……行きましょう。私が使つた馬車で行けばいいですわよね？」

と、あれよあれよといつ間に、ピノーリアの花畠に行くことになつてしましました。……ちょっと待つて下さい。私、参加するだなんて一言も言つてないですよ。……？

中編（後書き）

会話ばっかり…… o r z

「……どうしたことになつたんですかね」

ピノーリアの花畠に何の問題なく着きました。馬車で誰がハルト
ムートさんの隣に座るか、争いにはなりましたけど。結局はハルト
ムートさんが馬の乗つて、残りは馬車になりました。

私が馬じゃ駄目だつたんですかね。乗れませんけど。馬車の中は
牽制と殺氣で、殺伐とした雰囲気でしたよ……！　3時間ものの
間それですよ？　耐えられます？　……ロルシャーエだけが癒やし
でした。

「恋と好奇心は別じゃからな」つて言つて、私の世界に興味持つ
ていたらしく、簡単に説明したんです。

……上手く説明できなくて、全然ものを知らなかつたんだと思い
知られました。不勉強がたたつたんですね……。こ、こんなこと
になるなら、しつかり勉強しておくんだった……！　あ、でも今
となつては意味ない？

そうそう、問題なく着きはしたんです。着いた後が問題でした。
東京ドーム一個分はあるんじゃないかつて程の広さの、色とりどり
の花咲く場所には、綺麗なドレスを着た人から、麻布製？の地味
な服を着た、沢山の女性が居ました。

聞いたところ、普段はいても10～15人らしいんですけど、明
らかにそれ以上いるんですよね。100人はいるんじゃないでしょ
うか……。

あれ？　今のメンバーしか、決着のこと知りませんでしたよね？
外に出てから、決着の話した覚えないですし。

目の前の光景に圧倒されていると、メルフィナさんが声をあげた。

「うへ、これはどうこいつですの！？　何故こんなにも邪魔者がいるのです！？」

「あたしがみんなに広めたのさ。公平じゃないといけないんだろう？　なら、ハルトムートが好きな奴全員に伝えないと駄目じゃないか」

あ、だから出発する前にメルフィナさんの従者を脅して街に走らせたんですね！　男前つてレベルじゃないです。漢すぎますよ……。しかし、ハーレム補正も悔れないですね。この5人だけかと思つていたら、こんなに大勢の人を魅了していただなんて。恐るべし、『絶対ハーレム』！　……まあ、100人も言い寄つてくる人がいたら、ハルトムートさんも苦労しますよね。美形には美形なりの苦労がある……。垣間見てしまつたようです。

「はい、みんなよーく聞け！　目的はアザレの花！　報酬はハルトムートの嫁！　以上！　勝負の始まりだよっ！！」

アディラさんが威勢のいい声で、始まりの合図を告げたと思つたすぐに、女性が我先にと花畠を駆けていく。まるで狂つた牛の群れ……づふんづふん。女性にそんなこと言つちゃダメじゃない美夜！！でも、あんなどたばた走りまわつていいんですかね。もしかしたらアザレの花踏んでるかもしれないのに……。

アザレの花を探しに、女性が散つていく中、未だに私はスタート地点にいた。

……さてと。私はどうしましよう。正直言つて、私は参加する意味がないんですよね。だって、別にハルトムートさんと結婚したい訳ではないし、本気でハルトムートさんが好きな人達の邪魔をしたいわけでもない。

ハルトムートさんのことと本気で好きでもない私が、アザレの花を見つけてしまったなんて、一生懸命に花をさがしている人たちに失礼極まりないです。

だとしても、ハルトムートさん自身はどうなるんでしょう。好きな人との結婚しなくちゃならない。王とか貴族とかは政略結婚ってことであり得る話なんでしょうけど……。幼い頃からの夢、つて言われちゃうと重いじゃないですか！ 十何年もの夢ですね？

非常に不本意ながら、ハルトムートさんの夢は私にかかりている。私がアザレの花を見つけないと、ハルトムートさんは望まない結婚をすることになってしまつ。

「…………私にどうじるつていうんですか…………。ハルトムートさんの将来を私が握つているだなんて…………。

「ミヤ」

「…………ハルトムートさん」

「ミヤは探しに行かれないのですね…………」

夢さが具現化しました、と言つていいほどの微笑みを浮かべる。や、やめてください！ 私が悪者みたいじゃないですか！ それも運命ならば……。みたいな感じで受け入れようとしてください！！！ と、とりあえず話題を逸らそう！

「ああああ、あのですね。そもそもアザレの花自体を知らないので、探そうにも探せないといいますか…………」

「そういえば、そうでしたね。申し訳ありません。アザレの花は、淡いピンク色で5枚の花びらをもっています。普通の花より一際小さな花ですので、見つけるのは至難となっています」

普通の花より小さいといつて、もつと見つけるのが難しいのです……？ 大きくて目立つ花だったら見つけられるだらうけど、背丈が小さこと他の花にまぎれて、絶対に見つけられなこと思つんですね。

何故そんな無謀ともいえるのを、条件としたんでしょうかアーティラさん。そしてみなさん賛同したのは何故なんでしょうか……。アーティラさんはその方が燃えるだらう……って言ひ残しますね。

「……とつあえず、探してみますね」
「ええ、……お気をつけて」

足元に咲く花を見ながら、歩き始める。探すふりついつかなんといいますか……。じーっとしていられないんですよ。

ハルトムートさんの願いもある。女性たちの想いもある。どちらも重くて、私はそんな責任を背負いたくない。投げ出してしまえればどんなによかったことが。

……なんで私、ここにいるんでしょう。そ、そもそもあれです！

普通にも程のある私なんか召喚しちゃったのが、ハルトムートさんの運の尽きだつたんですよ！ ガツツリ肉食系女子だつたら速攻結婚ウエディング！ ハッピーハンドー いつまでもいつまでも幸せに暮らしましたわ、ちゃんちゃん。だつたでしょ。

「ほんと、なんで私だつたんですかね……」
「おんしだつたからじゃろうな」
「あれ？ 口ルシャーハ。ビーハヒーハヒーハ？」
「追つてきたのじゃよ」

何か企んでる笑みのロルシャーハ。な、なんですか悪役みたいな

笑顔！ ちゅうと怖いですよー。怯える私に、ロルシャーハーは一回噴いてから、大声で笑つた。え、何、何事！？

「心配じやの一。実直すぎるのも考え方のじやな。……も、変なところじや惱むるよつだがの」

「な、何？」

「今ぐらこ素直になつたほつがよこぞ。その内できなくなるからの大丈夫じや。おんしなら出来るとわらわは信じとるがー」

「……びつて私なんですか」

ロルシャーハーは簡単に言つてのけた。……鈍感じやないから言われてることくらい分かる。よく「美夜の感情はわかりやすいね」「ついわれるし」。じちやじちや惱むな素直に行けつて言われてるもの分かる。でも、でもやっぱ、責任が重すきやしないでしょつか……。潰れる自身、ありますよ~。

「何をそつ頑なに拒むのじや。怖いのかえ？」

「そりやあ怖いですよ。怖くないわけがありません。……それより、ロルシャーハーはいいんですか？ 私のことなんか気にして」

ロルシャーハーだつて、ハルトムートさんの方が好きなはず。他の女性達が花を探しているのに、私なんかにかまつていいんですね。ハルトムートさん取られちゃいますよ~。いいんですか？

「ほほー、わらわの心配をするか。ならば問題ないぞ。わらわは一生結婚出来ぬからな。世界の為に巫女としてありねばならぬ。わらわの身は、世界に捧げられておるのじや」

あ、思つたとおり巫女さんだつたんですね……。巫女さんじやなかつたら、一体誰なんでしょうか。ではなくて……

「じゃ、じゃあなんでアザレの花探しに参加してるんですか！？」

「お遊びじゃ。ほほほほほほー。女の戦いは面白いのうー。人の隠しても隠しきれぬ欲が現れやすいからのー！」

高らかに笑い声をあげるロルシャーハ。ひ、ひどいよこの人……

……」ひかは真剣に悩んでいたのに、お気楽すぎやしませんか……

……

力が抜けきつてしまつた私を見て、ロルシャーハは声色を変えて叫びてくる。

「そん調子でやるのじゃ。それがおんしの力となり、良き道を示す。おんしにとつても、の」

「なんですか、その含みのある言い方は」

「予言じや予言。巫女様のありがたい言葉じやぞ。ほほほ、せいぜい頑張るのじゃなー。……さてとの。お膳立てはしてやつたのじゃ。あつむりシメるが良いぞ、ハルトムート殿」

ちらりと私の後ろへ目線を向けてから、ロルシャーハは「ヤニヤしながら去つていった。……え？ 振り返ると、そこにはハルトムートさんが。い、いつの間に！

「//ヤ」

「……はー」

ハルトムートさんの真剣な雰囲気に、呑まれてしまつ。真っ直ぐに私を見るハルトムートさんは、……かつこよかつた。可愛い可愛い言つてて、ごめんなさい。こんなに見つめられたことなくて、なんかムズムズするのであまり見ないでくれませんか……！？

「私は早急すぎました。いきなり結婚を申し込むなど、男の風上にも置けない行為です」

女は結婚となると、将来のことも含めて考えますからね。そう単純にうなずけませんよ。将来のことを考えたら超優良物件には間違いないですけど。

「ですから、ミヤには徐々に私のことを知りていただきたい。私も、ミヤのことを知りていいみたい。ええっと……、と、友達から始めませんか？」

……友達？

「ふ、う、あ、あは、あはははははは……！」ハルトムートさん、友達からって……！ 絶対誰かに教えられたんですよね！？ な、なんか似合わない言い方……！…」

今までお堅い感じでいつてたのに、急にフレンドリーというか、ハルトムートさんらしくない言い方に爆笑してしまった。絶対ロルシャー工あたりに仕込まれたとしか思えない……！… 笑い転げていると、ハルトムートさんが落ち込んだ様子でぼそりとつぶやいた。

「だつ、駄目、なのでしょうか」

「そうじゃなくてですね、あは、はははっ、いいです、いいんです！」

「はい！ お友達から始めましょう！」

ああもー、馬鹿らしいですね！ あれこれ悩んでも仕方ない、か。

大体私はハルトムートさんの為に呼ばれたんだし、今、この世界

で頼れるのはハルトムートさんしかいないですし！私は、ハルトムートさんの力になりたい。ハルトムートさんの側で、ちょっとびつ頑張つていけばいいですよね！……結婚どうのはやめておき。

「……あ、でも、アザレの花はどうあるんですか？見つけておかないと、ハルトムートさん結婚することになっちゃいますよ？」

「心配いつません。……//ヤ、手を出して頂けますか？」

素直に右手を出すと、手のひらに一輪の小さな花を渡された。……ん？

「あ、れ？ は、ハルトムートさん、これって」

「アザレの花です。ミヤが探しに行つた後、見つけました」

ゆ、勇者補正ですか……？ 簡単に見つけちゃつているんですけど……。ていうか、ハルトムートさんが見つけてよかつたんですね！？ 女性が見つけなくちゃいけないとか、そういうのではないんですね！？ はー……、裏をかかれましたね、私達。ハルトムートさんが見つけちゃいけないって言つてはいませんし。

ハルトムートさんの説明通り、アザレの花は小さい。あれです、結婚式のブーケに入つてる小さい花……なんだつけ、えーっと、カスミソウ！ カスミソウに似ているんだ！ アザレの花は一輪咲きだけれど。

「今すぐ、結婚して欲しいとは言いません。あなたの気持ちがどのよつな形であれ定まりましたら、私に言つて頂きたい

「はい。……必ず」

ハルトムートさんは、私のしたいようにすればいい、と言つてくれた。結婚しない、という道を選んだとしても、ハルトムートさん

は頷いてくれるだろ？」そこはこう、強引に「俺とずっと一緒にいってくれ！」とか言ってくれた方が、乙女心をくすぐられるといいますか……。いてもいいんじゃないかなって気になりそうなのに。ハルトムートさんではありえないでしょうけど。

とにかく、決めたら必ずハルトムートさんには言おう。どんな風にしたいと決めても。それが、ハルトムートさんに對する私のなりの誠意。

「決まつたよ、じゅうじゅうの」

「ロルシャーハー！？」どこかに行つたんじゃないですか！？

「わらわばずつと見ておつたぞ？」

「な、な、な……見てたんですか……そこは、後は若いお一人で……。とかじゃないんですか！？見合いぢやないけど。出歯龜はいけないんですよ！」

「おんし案外ノリ氣じゅうの。さてさて皆の衆一、聞こえておるかえ？アザレの花はハルトムート殿が見つけおつたぞ。解散じゅ解散。ハルトムートはミヤに渡してしもうたからの一」

「もう、駄目なのですか」

急激に周囲の温度が下がった。近くにはうつむきながらぶつぶつと呴くマビアさんがない。マビアさんの足元の花は、黒く染まったかと思うと萎れていった。歩けば歩くほど、黒いのが広がつて花は彩りを失つていく。

「な、なんですか、この悪の波動みたいなの……。薄暗い霧まで発生しますし、あ、危ないんじゃないですか！？」

怖くなつて近くにいたハルトムートさんの腕を左手で掴むと、霧が破裂し辺りを更に暗くした。おまけに吹雪がマビアさんの周りに

渦巻いている。

あ、あああ、思わずハルトムートさん掴んじやつたのがいけなか
つたんですねええええ！――！

崩壊した笑顔を見せつけながらマビアさんが私達に襲いかかって
くる！ うあ、もづ、もづ駄目っ！！

ベツチ——ン！！

非常に良い音をたてて、マビアさんは地面に突つ伏した。え？
何事？ 右手もなんかじんじんするし……。あ、アザレの花落

しあわせだった。

「……………み、ミヤ？ 貴方は一体なんてことを……………」

あ、いえ、そうではなくく……」

希少な花なのに、落としちゃつたりして罰当たりすげーなー。慌ててアザレの花を拾う。ほ、よかったです、無事ですね。

「豪快にいったのー。そこまでしたのを見たのは初めてじゃ」

「おんしか」ヒア風をひいてたまにいたんしゃか……その様子

「ほれ、形無じじやのハルトムート殿」「

「……仰る通りです。彼女の前ですと、私は駄目なようですね」

精々頑張るがよいぞ！」

「はい、彼女に認めてもらえるよう、精一杯努力します」

よく分からぬいけど、なんか不穏な感じがしますよ！？ わ、私を巻き込むのは勘弁して下さいね！！ …… ハルトムートさんの側にいると決めた以上は、巻き込まれるのは確実でしょうけど。ぶつ倒れていたマビアさんが、幽霊のごとく起きあがってきた。

「…、怖いですよー！」

「……、ふ」

「マ、マビアさん、わっせは「めんなさい」！ 不可抗力といいますか、ええと、好きでやつたのではなくてですね、ああつと……」

「ふふふふ、私目が醒めました今まで私のことを正面きつて見てくれた人がいたでしょ、うかいいえいませんでした私を面倒な奴としか見ず避けることしかしない私を腫れ物のように扱つて私を見ようともしない理解しようとしない私を分かつてくれないだから私も理解しようとしなかったですが今なら私は理解できる理解することがであります私のことを見ててくれたから私を見たからああこんなにも世界は素晴らしいのですね貴方という理解者ができるだけで私の心は澄み切つた感じでいっぱいです貴方さえいれば私はどんなことでもできそうです」とありますあ何なりと御命令を……」

人が変わったように、ギラギラとおどりおどりしい輝きを放ちながら長ゼリフを言い切つた。命、令？　え、え、え、マビアさんいきなりびっくりしたんですか……？

「見事に次の依存対象になつたの。ほほほ、よいではないか。これでおんしの当面の安全は、ある意味確保されたんじゃぞ」「な、なななんですかそれはっ！？」

そんなの望んでいませんつて……！　命令とか出来るような立場とかじゃないです。私はあくまで普通の一般人なんですから、偉そうなことはできないんですよ。小心者を舐めないでくださいー。

「後々なるのじゃ、諦めい」

どういう意味ですか。怖いこと言わないでくださいー！

「ミヤ、私が側にいます。共に頑張りましょう」

嬉しいけど嬉しくないですその言葉。 原因はハルトムートさんなんですから！

じつして、ハーレムの人にはねながら、ハルトムートさんとの生活が始まったのであった。

……お、王妃とか無理です勘弁して下さい。

ある一田（前書き）

拍手に掲載していたものに加筆修正・追加したものです。

ひとまずハルトムートさんは婚約、という形で落ち着きました。婚約も早すぎると思うんですけどね！？でも、花畠騒動を犯した以上、なにもなしという訳にはいかなかつたらしくって……。

そんな訳で、私は婚約者として、ハルトムートが養子に入つた国の城で、贅沢な一室を与えて過ごす日々が続いているんです。それで、勇者であり王子でもあるハルトムートさんの婚約者なのだから、それ相応の人になれつてことで、窮屈なドレス着たり、作法や礼儀やら常識を覚えたり……。

てんやわんやでひーひー言つてゐる田々が続いています。

今日は、そんなとある一日をおおくつしますね。

朝、起きると一番に会つのは、私の護衛になつてしまつたマビアさん。……相変わらずな人です。

「おはようございますミヤ私は今日といつ日が素晴らしいで私も私はミヤの為に死ねます死んできます貴方が命令すれば私は何でもしましょう今田はあいつらになにをなさいますか暗殺ですか毒殺ですかそれとも焼き殺すのをお望みですか私としては溺死させるのも一考だと思いますまあ御命令を頂けませんか今の私はミヤの為にいるのですから」

「い、いや、私を守つてくれるだけでいいから！ 間違つても殺したりとかしないでね！？ 勝手に死んだりしないでくださいよ！？」

「ああミヤはなんて優しいのですかあなたを襲う者はすべからく死すべき運命だというのにしかしそれこそミヤなのですね他の下賤な者ならば戸惑つ」となく排除を命じるでしよう分かつていますミヤが望まないところとはそれでも私はひねり潰したくてたまらな

いのです貴方に悪意が向くのが私には耐えられないミヤにはミヤにはミヤで
いてほしいのですからいえどんな風になつてもミヤはミヤですの
語弊がありますねすみません私はどんなミヤでも好きだと言えます
こんな私を受け入れてくれたのですからおや早速馬鹿で阿呆でどう
しようもないモノがきましたねミヤを傷つけようとするなど笑止千
万というわけで私は行つて参ります後私のことなど呼び捨てでいい
のです私などにわざわざ敬称をつけるほどではないのですから

「い、行つてらっしゃい……」

邪悪な笑みを浮かべて、マビアや……マビアは文字通りその場か
ら消えた。

突如現れた私に対する風当たりは強く、殺そつとする人は多いら
しい。……なんか、あんまり想像つかないんですね。殺される心
配なんて全くない平和な日本に住んでたんですから。

危険があるつてことはハルトムートさんのハーレムで十分に分か
つてはいるんです。……あの殺氣に私は勝てないです。その場で土
下座しちゃう勢いです。

それなのに私がこんなにも呑氣でいられるのは、ひとえにマビア
のおかげ。私が気がつく前に、手早く退治してくれるからです。

政治面とかそういう難しいところは、ハルトムートさんがやつて
くれているらしい。らしいことしか言えないのは、私があんまり外に
出てないからです！

ほ、本当にマビアがいなかつたら私どうなつてたんでしょうか…
…。責任感の強いハルトムートさんなら、なんとかしたとは思つん
ですけど。

マビアは強い。とにかく強い。所謂魔法使いなんだそうですが、
よくある呪文を必要とせずに魔法をしてしまう。手足のように使
うことができちゃうらしいです。

能力を買われたのもあって、ハルトムートさんの魔王討伐に同行

していたとか。

……そ、そんな凄い人に私、喧嘩売つてたのかと思つと、我ながら無謀すぎて笑えない。笑えなさ過ぎる……。

マビアとの挨拶を終えた私は朝食にはいるのでした。

*

朝食を食べ終えた私がすることは、……自室で勉強。ま、まさか異世界に来てまで勉強するとは思いませんでしたよ。ハルトムートさんが召喚する為の魔法しか研究してなかつたので、元の世界に戻れない以上、ここラムフォーラスのことを知つておかないといけないわけで。

泣く泣くラムフォーラースの常識とか歴史とか、お勉強するしかなかつたんですよね……。もう勉強はこりごりだというのに！

歴史を1から覚え直しは堪えますよ……。その上、言葉は普通に通じるのに文字はさっぱり分からないんですね。文字も一から覚えなくちゃいけないんですね……！

「いや、止まるでないぞ」

閉じた扇子でバシリと頭を叩かれる。軽く叩くけど、意外と痛い。唸りつつ、止めていたペン（インクを使うやつ！）を動かす。書きづらいたらありやしない。ラムフォーラス歴159年、初の勇者誕生、世界を救う……つと。

「」の文字はきちんとかけないので、日本語でメモメモ。その内「」での文字で書けるようになんないといけないんですね！

とにかく、今は歴史とかその他もろもろ、今はロルシャーハー工に教えて貰ってるんですよ。なんでもロルシャーハー自ら、教師役を立候補してくれたらしい。全く知らない人より知っている人の方が安心できるから、凄く嬉しかった。

「ふむ、その調子じゃ。」この国の未来の為にも、おんじこはしつかり覚えてもらわないと」

「や、いやいやいや、まだ私、結婚する気ないですからねーーー？」

「『まだ』ここにひとまごとの氣はあるよつじやな」

「いやー、やした表情で私を見てくる。そ、そんな揚げ足とらないで下さいよ……！　いや、その、可能性であって、…………あああああ！　違うんです……！」つい、なんとか話題をそらさなくては！

「み、巫女つてなんですかつーーー！　建国以来、ずっとこるようすけどーーー！」

「ほほう、話をそらすか。まあよい。……巫女は神の声を聞き、ラムフォラースに暮らす全ての者に伝える役目をもつてゐる。わらわは92代目になるの」

92代目…………！　日本の皇室より…………は続いてないか。あれ、どうだつたっけ？　お、覚えてなーーー！　あああ、やつぱり歴史は苦手…………。

でも、それだけ続いてるとなると、相当な歴史があつたんだろうな……。血を何代も絶やさないよつこするだなんて、相当の努力がいるでしょつし。

「…………ん？　巫女つて世襲制なんですか？」

「違つぞ。巫女は死んだら転生をするのじや。そして前世の記憶を受け継ぎながら新たな生を受け、巫女として名乗りである。つまり、

わらわは一代目からの記憶があるのじゃよ

「え、ええええ！？」

道理で幼い割には大人っぽいというか、なんというか……。大人の余裕があるといふんでしょうかね。流石ファンタジー。何でもありでびっくりです。

というか、結婚できなって言ひてましたね忘れてました。

「でも、大丈夫なんですか？ そんなに大量の記憶を持つちゃつて」

脳に沢山の記憶が入ってるって事ですよね？ 人の脳には限界があつて、どんなことでも忘れていいてしまうから、なんちやら、つていうのがあるはずなんだけど

「前世は前世で、今は今。わらわはわらわとして、今を楽しんでおるからの。昔は関係ない。大丈夫じやよ。心配せんでも良い。巫女の中でも特に変わり者のわらわじやぞ？ そんなことへでもないわ」「あー、なんか否定できません」

おもしろがつてハルトムートさん争奪戦に参加する辺りが特に！ あ、あんな修羅場に自ら飛び込むだなんて、どうこう神経しているんですか？……！

「もうこの話題は終わりじや。さてさて続きをしようぜ」

「…………う、はーい」

早くお昼ごはんが来て欲しいようなそつでなこよつな……。
複雑な心境に駆られる私でした。

*

勉強が終わって、私に待っているのは……恐怖の昼食。え？ なんで恐怖かつて？ ええ、それは凍える吹雪が舞いに舞つてるからですよ……。

「作法がなつていませんわ。音を立てて食事をするだなんて、なんて下品なんでしょう！ 身の程が知れますわね」

「う、……気をつけます」

「まあ。この程度のことを避けられないだなんて、この先貴女はどうなるんでしょうねえ」

私を嘲笑うメルフィナさん。メルフィナさんは私に礼儀作法を教えるために来ている。

これ。これです。この嫌味つたらしい……いえ、嫌味しかない言葉をぶつけられてばかりなんですよ、昼食は。

私が何かする度にねちねちねちねちと……。そんなに私を苛めたいんですかそうですか。きっと私に教えに来たのも、私をいじめる為なんですね分かります！

いや、分かりますけど！ 訳のわからない女が急に来て、好きな人奪つ……た？ んですし。私はその気はなかつたけれども！

あ、勿論、メルフィナさんは私に教えるのを最初は嫌がりました。でも、ハルトムートさんがお願いすると一発オッケーを出したんですね。

そりや、好きな人からのお願いだつたら聞きたくはなりますけど、ねえ。ハルトムートさん、メルフィナさんに対してもっと酷いよう。と思ってた罪悪感もこのいじめでなくなりましたけどね！！

「ううう……、そ、そういうば、なんでハルトムートさん、メルフ

イナさん、ロルシャー工には、一文字目に『ル』がついてるんですか？」

「そんなことも分からぬの？ 嫌ですわ、察しのつかない子は」

扇子で口元を隠し、見下した眼で私を見てくる。……ここの人には扇子がないと駄目なんでしょうか。ロルシャー工も持つてたし。貴族の嗜み？ つてやつなんですかね。

「いえいえ、なんとなーくは分かつてるんですよ。お偉いさんには必ず一文字目に『ル』がついてますよね。分かるんですけど、そことのところ詳しく述べていただきたいなー、と」

「それならそーと始めから言えば良いのですわ。どん臭くて嫌になりますわあ」

……この人は一々、人のことを貶さないと気が済まないんでしょうか。流石の私でもイラつときちゃいますよ。

偏見は持ちたくないんですけど、持っちゃこうになっちゃうじやないですか！ 温厚な日本人でも腹の中はどうなつてるか分からないんですからね！

メルフィナさんは貴族の中で一番偉い位の公爵家、ハルトムートさんは元公爵家の現王子様、ロルシャー工は元々は一番目に偉い侯爵家で現巫女さん。

こうしてみるとお偉いさんばかりで、本来なら私にとつては雲の上の存在なんですねー。それ以前に関わることなんてありえなかつたんですけども。

「『ル』がつく者は、建国当時に国家を設立した偉大な者の血筋をひいていることを表しますの。それ以外が一文字目に『ル』を付けるなど言語道断。即刻名前を変えさせられますわ」

「なんでも、そんなことになつてはいるんですか？」
「変なことを言つたのね。ここでは当然のことよ」

「ううん、ここでの常識ってやつなんですね……。よく分からぬけど、納得するしかないのかな？ 郷に入れば郷に従えつて言いますし……」

あれです、外国の文化の変な所を聞いて、なんか変だけどそこ独特のところなんだーって思うような感じで！

「わかりました！ よく分からぬけどとりあえず納得しておきます！」

「そのようなことわざわざ言わなくてよろしく…… 馬鹿ですねー？」

失礼な！ ちょっとイライラしたからハツ当たりしだけですよ！！

*

食後の運動はきついです。お腹の中のものがぱろりそつでもう私は黙目です死にます」

「なにやつてるんだい！ これくらいでへこたれるよじゅや、ハルトムートはやれないね……」

「う、ああいがんばります」

地獄？ 天国？ いやいや地獄ですよこれはいやでもアティラさんによつてもらえてるつてこいつ点は天国なのでしょうかわかりません

んもう駄目です。

簡単な護身術を教えてもらひつつていつ知りで、アティラさんから習っているんですけど、なんか、護身用ではなくて本格的な剣術を教わってるような……。

護身で良かつたんじゃないんですか？あれ？私が間違ってるんでしたっけ？私がおかしいのかしらー。あはは。筋肉が痛いです。筋肉痛が響く響く。

「何考えてるんだい！？」意識を逸らすよつじや、あんたは死んでるよつ！

「はい」「めんなさいいいいい！」

眼の前に剣の一振りがくる。教わったように持つてている短剣で対抗し、左側に受け流す。力のない私じゃ長い剣なんて持てないから、短剣にしてとにかく受け流す方向でいつてているのだ。

これだけでも精一杯なのに、攻撃を短剣で受けて反撃！うりやあ！なんてできないですからね！非力な私にできるわけないじゃないですか！

召喚されて特別な力がついちゃった！って展開はないんですからー……現実は厳しい。くづくづく、つづづく必要なんですね、特典つてやつは。

私には、特に秀でた才があるつてわけじやないんですよ。……今からでもいいのでくれませんか神様仏様ハルトムート様！

「よそ見するなつて言つたるひつー？」

「ひきやー！」

鞭……じゃなかつた、剣が私に向かつて素早く振り下ろされる。反射神経フル稼働で何とか後ろへと避けましたよ！しかも今ビュオンつて音鳴つてましたからね！

でもその前に私自身に突つ込みたい。「うきや、ってなんなんですか美夜さんよ……。女の子がそんなはしたない声だしちゃ駄目でしょっ!!」

「へえ、それでも考え方とは見上げたもんだね。……だつたら考えなくせんまでだ!!」

「いいいいいいやあああああああああああああああああああああま、ま、ま、ままままままー！」

それから、アティラさんの猛攻撃が雨のように降つてくるのでした……。

攻撃していく様はとても美しいのですがもつ本当に無理です、無理です。勘弁して下さい……。

*

アティラさんとの戦闘訓練が終わって、軽く汗を流す。広いお風呂場があるんですよ。極楽極楽！

と言いたいんですけど、私が風呂にはいっている時、メイドさんも入ってくるので中々くつろげないんです。

貴族の豪華接待みたいな感じで、私の体を洗おうとしたり……！

！そ、それはくすぐったいので遠慮しました。

他人に体を触られるのはどうもむず痒いんですね。

着替え終わった後は、多少勉強をしてからの夕飯。その時、必ずハルトムートさんと一緒にことになってるんです。

ハルトムートさんは忙しく中どうにか時間を作つて、絶対一日に一回はいらっしゃるんですよ。

本当はわざわざ私のところに来る必要はないんだそうです。

ハルトムートさんも疲れているでしょう。本当にマメな人ですよね……。そういうマメなところがいいんでしうけだ。

大体部屋には誰かメイドさんが待機してるんですけど、ハルトムートさんが「ただでさえ会える時間が少ないのだ、二人っきりにさせてくれないか」という小つ恥ずかしいお願ひをしていたので、私とハルトムートさん以外部屋には誰もいない。

いても本当に空氣の如く静かにしているから、そんなに変わらない気も……、いやいや、人目があるってことがあれですよね。はい。でもいてほしいような、そうでないような……。ふ、複雑。だって、年頃の男女が部屋で一人きりって、あのそのえーっとうんぬんかんぬん。

一応婚約？ しているとはいえ、ここでのマナーとしてはあまりいけないことであつて、あーあああああああああううう。言わせんな恥ずかしい！

……いや、ハルトムートさんだからそんなことはないって信じてますけど！ 煩惱は振り払う！ 払う！

「えーっと、そういうえば！ ハルトムートさんの『ハルト』って部分、私の國の名前みたいですね」

「ミヤの国ですか？」

「はい、春の人って意味？ でいいのかな……？ まあその、『春人』か、晴れる人って意味の『晴人』っていうのがあつたりするんですよ。他にも色々あるんですけどね」

食べ終わった食器を適当にどかして、棚から紙とペンを取り出して実際に漢字で書く。ついでにルビふつて文字練習！

じじつて西洋っぽいくせに、文字はアラビアとかエジプトというか、そんなイメージの文字なんですよねー。

んーっと、よし、書けた。……ちょっと歪な気がしないでもないけど、読めれば、読めればいいんですよ！ええ！

「……硬い字ですね、美夜の国の文字は、「あー、まあ漢字はそうですね。大体力クカクします。ひらがなだと柔らかいんですけど」

珍しそうに漢字を見つめるハルトムートさん。少し大きく開いた目がなんか可愛いです。ず、ずるい。

おまけにひらがなでカキカキ。……ひらがなで『はると』ってなんだか間抜けな感じがしますね。いやいやいや、けなしているとかそういう訳ではなく。

ひらがな全般にいえることですからね！『』、誤解しないでよねっ！……って、私は何キャラなの。

「様々な文字がミヤの世界にはあるのですね」

「まあ、私の国が特殊というかなんといいますか……。私の国ぐらいですよ、こんなに文字あるのは」

寧ろ世界共通なこここの文字の方が恐ろしい。神様から教わった文字であるぞー！ つてことど、どこの国も使っているらしいそうな。宗教戦争とかはなく、実際に存在するラムフォオを唯一神としているからなんですね。……勉強しました！

ドヤアつてなつてると、ハルトムートさんが痛い所を突いてきた。

「ミヤの名前にも意味があるのですか？」

そ、そこを突っ込みますかハルトムート様。突っ込んじゃいけませんよハルトムート様。

こんなに似合わない名前で本当に申し訳が立たなくなつているん

ですか「らー」

「えー……と。漢字では「」つ書きます」

美夜つと。流石書き慣れてる文字だけなあつて、まあまあ綺麗に書けているようと思える。何気にバランスが難しいんですね、この字。

「ううううう、あんまり説明したくないんですけど、うーん……。
で、サクッと終わらせればいいですよ……ね！」

「「」ちの字が、美しいとかそういうことを表す字で、「」ちは夜を意味する字です」

指さしながら説明をさっさと終わらせる。夜は別にいいんですけど、『美』つていう漢字がどうも……。

よく名前に使われる字なのは分かってはいます。でも、自分にその字があるのがどうもしつくりこなくって。

こんな私が『美』なんて文字を使っていいのかと。

あ、トラウマとかあるわけじゃないです。私の顔は上でも下でもない普通の顔ですから……！

「なれば私は……」ちらの文字がいいですね。晴れる人、という意味が含まれているのでしょうか？」

「意訳ですけど。大体の人はそういうイメージを持つと思いますよ

すつ、つと綺麗な指が『晴人』を指す。くつ。男の人なのにこんな綺麗な指をしているだなんて……！」

がつしりとしているのに、無骨なカンジがしない美しい手つてどういうことですか。矛盾じゃないですか、矛盾！　くつ、勇者恐るべし。

「ミヤ」

「は、なんで、『ゼロ』がしようか」

嫉妬でどつかいつてた思考が呼びかけで戻される。だ、だつて美しいんですもの……！ キー！！

「私のことを、この字の『ハルト』で呼んで頂けないでどうか」

「ハルト……、晴人ですか？」

「ええ、こちらの晴れるという意味合いの持つ名前で呼ばれたいのです。……あなたと対になれるのですから」

な、な、な、ま、ま、なん、ま、ま、ま、ま、ちょ、な、なんていう、爽やかな笑顔でなんてことをおっしゃるんですか？……！
くくくくくくくくくさいことを！ でもイケメンだからありだと思えてしまうとかなんなんですか？……！
ず、ずるい！ イケメンつてずるいです！ うわー、わわわわわ、顔が熱い。

う、ハルトムートさん、そんな期待した眼で私を見ないで下さるお願いします。ほんと、私のような凡人にはきついんですよ。きついんですけどばー！

「わっ、分かりました、よ、呼びます呼びます！ ……は、晴人、さん」

いいいいいいいいやああああああああああああああ恥ずかしい恥ずかしい！！！

ハルトムートさんは一瞬目を見開いてから、輝かしい笑みを浮かべて私を見てくるし……！

……今なら私、羞恥心で死ねます。

いたな感じで、へんやわんやな私の一皿せ過ぎてゆくのでした…。
…。

「アーヴィング、マビア」

豪華な椅子に座り、豪華なテーブルの上に乗ったお菓子をボリボリしながら呟く。今現在、お城のお庭でクッキー食べながらくつろぎ中です。私の反対側には、同じくマビアが座っている。

いやー、すごい贅沢している気分です。実際そんなんすけど。貴婦人たちが優雅なお茶会！ みたいな感じでパラソル？ の下でボリボリしています。

あ、お勉強とか訓練とかサボっているわけじゃないですよ！ ちょっと休憩を頂いただけなんですからね！ 多分三時じゃないけど三時のおやつタイム！

こいつて時計が作られてないので、正確な時間を測ることができていませんよね。だから大体としか言いようがないんです。太陽が一番上にある辺り、とか。

それにして、ショッピング菓子というか和菓子が欲しくなる今日この頃でござります。お菓子といつたら甘いものしかないですかね、ハリー。

「マビアには家族はいないんですか？ こんな、私についてもいらっしゃ、中々帰れないでしようし……」

「心配など無用ですああでもミヤが私なんぞの心配をしてくださるだなんてなんて光榮なことなんでしょうこれは大切な思い出として一番目にしまっておきましょう勿論一番はミヤが私のことを見てくれた時ですよちなみにミヤ私には俗に言ひ血の繋がつている者はい

ますがミヤの住むような家族はいないのですあれらは家族などとはいえないやつらなのですから気にしなくていいのです寧ろミヤにこのよつた心配をさせるよつたやつらなど滅ぼしてしまつたほうがいいのでしうねやうと決まれば早速滅ぼしきましょうとい加減田障りですし工作もしていく煩わしい蟻などこれを期に消滅してしまえばよいのですミヤの道を邪魔するところならば容赦など不必要ミヤを殺せは私がしませんとこう説で行つて参りますミヤ

「だ、だだだだめですマジアさんなんなんなん…！」

そのまま魔法を使って消えようとするマジアさんの手を慌てて掴む。じひ、殺しとかは駄目なんですってば！

……とにかく、さり気なく重要な発言してませんでしたか！？ マジアさんの家族が私を殺そうとしているとかなんとか……。

しかもマジアさんの眼、ギラッギラしてちゅうと、いや、かなり怖いです……。

「マ、マジアさん、ああああのですね、殺しは駄目です、殺しは！ ちやんとそういうのは法で裁かれたほうがいいんですからね！ ? 後、一応といいますか、家族ですか……」

「ミヤが殺されそうになつて、この辺には出来ません以前ミヤが仰っていた『田には田を歯には歯を』です殺そうとしてくるならなら殺してしまえですああこれもありましたね『殺られる前に殺れ』なんて素敵な言葉なのでしょうか言葉の通りだとと思うのです第一私の血縁は私のことを家族だなんて思つていません本當にただ血がつなも同様家族だなんて思つたことなどありません本当にただ血がつながっているだけなのですそんなミヤを殺そうとする下賤な奴ら等に家族の情など不要即刻消え去るべきなのです止められていましたがやはり待つことはできませんでした。この為と言われてもミヤに害為す者を一瞬でもこの世に存在させるのはミヤによくないだから私はこのですとめないで下をミヤそれと私のことは呼び捨てでお

願いしたはずです戻っていますよミヤでもそんな動搖して戻つてしまつ//ミヤが好きです愛しています」

愛の告白をされたしました、どうじみや。……じゃなくて……馬鹿、昔の私の馬鹿……！ あんな言葉教えるもんぢやないでしょうに……！

ってまたそーじゅなくって……ええっと、つまりマビアとマビアの家族は仲が悪いことなんでしょうか……？ そして、私のことを殺そうとしている。

マビアは即刻家族のことを消したかったらしくんですけど、誰かに待つたをかけられている……んでしようか。

ハルトムートさんなんですかね？ そもそもマビアと接触しようと/orする人は、私とハルトムートさんくらいですしそう。

理由は知らないんですけど、マビアはいろんな人から避けられている。最初は性格ゆえなのかな……と思つていたけれど、どうも違うみたいなんですよ。

それにしても殺そくだなんてどうして……って分かつてますとも。邪魔なんですよね、私が。ひょっと出の意味不明な女ですからね！ 分かっていても辛いものがあるつてもんですよ……。はあ。

「マビア、もう一度言いますけど殺しは駄目です。私のせいで人が死んでしまうだなんて嫌ですし、なによりマビアに殺しをして欲しくないんですよ、わかります？」

「あああああああああああああ私のことなど道具だと思つて下さい私はミヤに仕える運命道具はなんでもします道具には道具の役割があるので私は殺しの道具ミヤの邪魔をするものを排除する道具なので私に対してもう十分幸せなのですから今の私はミヤのいた言葉や思い出だけでもう十分幸せなのですから今私はミヤのために生きることこれが至高生きがいであるのですそれにいづれはあいつらは始末しなければならないのですからミヤは何も気にしなく

てこいのですよ

何も見ないふりなんてできるかー！… 流石にですね、死とか離れていた日本で育ちました私としては、死んだりとかそういうの痛ましいことはできるだけ避けたいんですよー。できるだけ考えたくないことですし、ねえ。

ああ、でも、このままじやあマビア行っちゃいますよねー！？ 確実に抹殺しに行きますよねー！？ ビ、どうすれば止められるんでしちゃつかつ……！？

えーっとあーっとうーとええええええ……。ビ、ビビビビビビビうでもなれー！！

「ママママママママー 私と家族になつましょー！」

……マビアの手を両手で掴み言いつしまった。うん、何を言つているんでしょうか私は。頭おかしいんじゃないでしょうか私。ほら、あのマビアでさえ固まってるじゃないですか……。

言い訳しますと、家族といい思い出がないならこれから作ればいいじゃないー という意味不明な思考回路に陥りました……。自分と同じもどりしてそこに至つたのが分かつてないです。

……マビアから返事が来ない。ずっと、不気味な笑顔を浮かべたままの状態だ。いつもなら私が喋り終えた後、間髪入れずに喋つてくれるのに……。

不安です。流石に不安ですよ、いつもいつもと違つんですからー。あ、あのー、マビアさんー？ オ、お返事は頂けないのでしきつがー？

田の前で手をぶんぶん振つても反応なし。へ、せっぱつぱつぱつこことを言つてしまつたんでしょうか……。

私がウジウジ悩んでると、みつせーメビアが動き出した。ただ
しゅりっと。私の手を逆に優しく掴んで。
普段ではありえないことを言つた。

私が生まれた時、私を産んだ人が水に包まれて溺死しかけたらし
い。私が癪癩を起こした時、そこら中が炎に包まれたらしい。私が
怪我をした時、人を傷つける鋭い風が発生したらしい。

私が、私が、私が、私が、私が、私が、私が、私が、私が、
私が、私が、私が、私が、私が、私が、私が、私が、私が、

私がなにかした時、何かが起こった。

みんな私の機嫌をとろうと、私の力を思い通りに使おうと、私に
とりいってきた。最初は分からなくて受け入れた。そうすればみん
なは笑みを浮かべた。喜んだ。

でも、段々気持ち悪くなってきた。気持ち悪い笑顔しか浮かべて
こないと気がついた。だから拒否した。そしたら、みんな離れてい
つた。

別に良かつた。気持ち悪い笑みを浮かべられるよりかはましだっ
た。

今度は私のことを色々言い始めた。悪魔の子、魔女、魔族、人間
じゃない、消える、いなくなれ、死んでしまえ、お前なんきや産ま
なきやよかつた、あの子だけ生まれればよかつた、あんたなんか妹
じゃない、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね。

ああ、そう。

何を言われても、感じなかつた。どうでもよかつた。

世間では家族という奴らから食べ物を『えられなくなつた。力があればなんとかなつたので、別に気にならなかつた。

私を殺そうとしてきた人がいた。思い通りに力が使えるようになつたから殺した。私には死ななきやいけない理由が見当たらなかつたから。

死ねと言つてくれるけれど、何故死ななくてはいけないのだろうか。自分の思い通りに私が動かないから？

なら私が死ぬ理由にならない。私の意志とは何ら関係もないのだ。

かといつて何故生きているのかと言われると答えられなかつた。生まれたから、生きている。それだけだ。

それ以外に何もなかつた。何かを感じることもなく、淡々と過ごすことばかりだった。

気がついたら、理由を探していた。私が生きている理由。何の為に、私は生きるのか。

色々な所を回つた。そこでも私は死ねと言われた。どうやら、私のことは広く知れ渡つてゐるらしい。どうでもいい。生きる理由に関係があるわけではないのだし。

魔王の活動が目に見えて頻繁になつた。魔物に襲われる回数が増えた。塩焼きにすると意外とおいしいことを知つた。

おいしいから狩つていただけなのに、國から評価された。血縁がよひこんだ。意味不明。

アナタモヨウヤクヨキミチヲスモウトシテイルノネ。

なんの呪文だ。意味不明。

ついでに私より先に生まれたヤツがなにか言つてきたが、これまた意味不明な呪文だつたので覚えていない。

突然國から呼び出しをされた。別にいかなくとも良かつたけど、何となく行つてみた。なにがあるかもしれないから。

……そこで、私は出会つた。出会つたのです。

私の生きる意味をくれる人を。

まっすぐに私自身だけを見つめ私に願い事をしてきた。あの、気持ち悪い笑顔はない。私に対してもいわゆる暴言を吐いてくることもない。

……私を、私だけを見ている。

他の奴らに気を取られることもなくただ私だけを。

私だけを！！

好き。

愛を捧げるようになりました。

彼と出会つてからは私の世界は一変したのです。全てが彼を彩つている。彼のために存在してる。何も感じることが出来なかつた日々が、どれもこれも素晴らしく見えたのです。私も、彼を彩るためになんでいる。

だから伝えたかった。私の深き想いを心を全部余すことなく伝え
たかった。私がどれだけ貴方のことを想つているのか分からせたく
つて、口から出た言葉は全てを伝えるまで止まる」となど出来なか
つた。

愛している、愛しているのです。今にも私は愛で死ねます。死ぬことが出来ます。貴方の為ならなんだってやれます。命も捧げます。人も殺します。貴方の道具になります。盾になります。貴方の為ならどこまでもいつまでもなんだってやりましょう貴方の為ならば！－！

けれども。

彼は決して私を一番にすることはなかつた。

彼は彼の一番を見つけるために、召喚魔法を開発していたのです。

だから。だから一緒に死のうとした。一番になれないのなら、もうそれしか方法は考えつかなかつたのだ。

そう、思つていたのに。

三十六

私に、
触れた。

彼は確かに私を見ていた。でも見ていなかつた。私を、私の本質を避けようとした。それでも良かつたのに、ミヤは私を見て、私を拒絕した。触れた。私の本當を見た。

今まで誰も触れようとしなかった私に、触れた。

ミヤが触れた部分が熱い。熱い。じわりと私の全てを侵食していく。全身が火で焼かれていくような感覚に陥る。私を焼き殺していく。同時に、歓喜が心を埋め尽くす。心臓が踊り狂つて止まらない。

矛盾した内と外が頭の思考をぶち壊す。一つの事実だけが私の頭の中に残る。

私を受け入れてくれたというただ一つのことが。

あ
あ。

ミヤ。ミヤ。私の全て。

ミヤと田舎うまでは確かに、彼は私の生きる一番の意味でした。
今は共にミヤを守る者同士としての関係になっていきます。
優先順位は一番目になりましたが、彼がいなければミヤとは出合
えなかつたのですから。

ミヤ、ミヤ、好きです。貴方の願い事ならなんでもやります。貴方の願い事なら、なんでも。空にある星を取つて来いと言われたら行きましょう。王を殺して来いと命じたならばやりましょう。貴方の為なら、貴方の為なら！

なのに、あなたは。

ପ୍ରକାଶକ

「アマアマアマアマアーバー！ 私と家族になりましたー。」

どうしてそんなことをおっしゃるのですか……？

「それだけは絶対にできません」

「信じられないことばかりでかな声だった。え、今の幻聴でしょうか？ つて思ひけどの。しかも震こ噪りではなく単発！ 地獄の底から響いてるような声でもない」

この間にかマビアの表情も優しい感じになつていてなんだか怖いです。怖いです。う、こんなマビア見たことないんですけど……

……

「あ、その、『めぐ変な』ことを言つてしまつて……やっぱりこなじそんこと言つや駄目ですね……あ、あははははははは……」

……

でも、……ちょっとショックでした。今までマビアは、いつもきっぱりと完全否定することってなかつたんですよ。それがいっていつ詰ではないんですけど、びっくりしたといいますか……。

「うん、複雑。いい傾向？ だと私は思つんですが」

「ミヤを傷つけてしまつたようですね、すみません。しかしながらこれだけは譲れないのです。ミヤは汚れてしまつてはいけないのでですから」

……このマビアは魔女から聖女にチョンジしたんでしょうか。怖いんですって、怖いんですね……。変わりすぎで怖い！ このマビアは誰ー？

いつも怖いとか思つていじめんなさい、でもこっちの方が怖いです！

「ミヤ、私にとって家族とは嫌悪する対象です。排除すべき輩です。殺すべきものです。そんな括りにミヤを入れるわけにはいかないのです。絶対に。そう、絶対に絶対的に許されない」

聖女の笑みに影がさす。あ、禍々しさが戻ってきたような……。
これでほっとするとか、私だいぶ毒されてますね。こっちの方が怖くないです。ではなく！

「アビアはどこで家族が安らげる存在じゃないって」
した。でもでも、アビア的に考えるとそれって……。

「マビア、マビアにとつて家族は家族じゃないのですよね？　なのにマビアは家族というそのものが嫌いになつてゐる。血のつながつている人が家族じゃないと思っているんなら、今のマビアに家族はいませんよ？」

家族じゃないって言つているのに、結局マビアにとつては家族のままで、『家族』そのものを嫌がつてるんですね。今までの発言を省みると。すぐくちぐはぐだったんでおかしいなーと思つていたんですよ。

私が言い終わつた途端、またマビアが固まつてしまひました。
困るんですつてば。出方が分からなくなるじやないですか！

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନ୍ତିରି ପରିଷଦ୍ୟ

突然、一筋の涙を流した。

ターン！！

友達曰く、「美夜つて無害そうな顔して棘持つているよね~。素知らぬ顔してさつくりいくし」らしいそうです。後、暗殺得意そうだねとも言われました。何故。

とりあえずなんとかしないと……！

「マジ、マジアー!? エ、わ、あ、言こ方きつかつたですよな!?」
「めんなさい、気づかない内によくやつねやつ」とあります

... ! ?

やはりミヤは私の神様なのです！！ 神よ、神よ！ ミヤ
が私なんぞを家族としたいのならばそうしましょう！ 一般的に言
われる家族のようになりましょう！！ やはりあいつらは家族など
ではなかつた、私に家族はいなかつた！！ やつらとの繋がりはあ
りますが関係ない、家族ではないのだから！！ こんなにも心が晴
れることが今までにはありませんでした！ ああ、ミヤ！ 私の
救い、私の神！ 私の、私の……家族。うふっ、うふふふふふふ、
ふふ、家族、家族、か・ぞ・く。家族うふふふふふふふふふふふふふ
うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

! ! !

狂喜乱舞。文字通りの様子になつてゐるマビア。私の手をブンブン振つて、狂気なんだか喜びなんだかどちらともつかない笑みで…

……ごめんなさい、前言撤回します。元に戻つても怖いものは怖

かつたです……！」

「うふ、うふふふふふ、家族家族、うふふふふふふ、ミヤ、ミヤ、ミヤにとつて、私は家族ならば誰なのでしょう？ 姉ですか妹ですか？ そのとも娘？ うふふふふふふ、母でもいいですよ、父でもいいですよ！ 祖父や祖母だってなんだって！！ 私はミヤの希望に沿います！！ ミヤの家族になれるのならばなんだって！！ ミヤ、愛してます愛してます愛してます！！ 溢れる想いは家族愛！！ 愛！！」

「おじいちゃんになれとかそんな無茶振りはしませんからね！？ えー、ええっと、マビアは何歳なんですか？ 私は16なんですか？」

「ううう、私ちょっと早まつたかもしれないです……。」「怖い、怖いよー。」

分かってはいたんですけどね！ もう腹をくくるしかありません！！」

「私は生まれてから15年程経ちましたミヤの一つ下ということになりますねああできればもう一年早く生まれたかったものでそろそろミヤと同じ年同じになれたのですからああああ今からやり直しききないものでしようかそうすればあの忌々しい奴ではなくミヤと双子になれたというのに一緒にうふふふふふ一緒になんて素敵なのでしょううふふふふふミヤと家族家族家族！」

「え！？ 一つ下だったんですか！？ てっきり年上なのかと……。あ、じゃ、じゃあマビアは私の妹ですね！」

18くらいだと思っていました。流石外国顔……！ 童顔が標準装備らしい日本人の尺度では分からないものですね。今度周りの人にも年齢聞いてみよう。

……ん？ あれ、さつきなんかまた、マビア重要発言をしていましたようなきがするんですか……。

「……マビア、貴方もしかして、双子……なんですか？」

「いいえもう双子ではありません家族ではないのですからしかし肉親的概念からいいますと存在します私より先に生まれたヤツなので俗にいう双子の姉になります確かミヤもご存知のはずです名前はすつかり失念しましたが私よりも髪の色が薄いヤツです眼の色は似ているかもしませんまったく汚らわしいミヤを殺そうするなどやはり早々に抹殺しに行くべきですミヤと家族になれた記念に行くべきなのです」

いやいや、記念日ならそんな犯罪を犯さないで下さい………

私の知っている人がマビアの双子のお姉さん？

そもそもここでの知り合いは少ないほうですし、会ったとしたら絶対覚えているはず。マビアの髪色より薄くて眼の色が同じっぽい人……？

マビアの髪の毛と眼は紅紫色。それを薄くするとしたら、赤系統の人つてことになる。アティラさん……はないですね。

いくら外人顔だからといって、年齢的にも身長的にもマビアと双子はありませんし。となると……？

「……も、もしかして、リーリナさんですか？」

リーリナさんの髪の毛は桃色、眼は若干暗めのルビーみたいな色。それ以外に思いつく人なんていないんですけども……！

「そいつた名前でしたでしょつかすみません覚えていないので分からないですですが多分ミヤの思い浮かべる人物で合っていると思います憎たらしきミヤの脳内に存在させるだけでも嫌だというのに

やはりここは世界中から跡形もなくするべきなのでしょうねとなると段取りをしなくてはミヤを思えば底でもないのですがミヤの不利にならないようひさすむこは色々としなくてはなつませんからつらふふ楽しみです」

不気味がデフォルトのマビア。可憐なことこの間葉が当たる
るリーリナさん。

双子にしては……いや、似てこなあわせてしまふか……。

「家族、かあ……」

夕飯を食べながら考える。ハルトムートさんは多忙らしく、今日は一緒に食事はとつていない。……意外と一人での食事つて寂しいんですね！　なんとなく味気ないです。

メイドさんいるにはいるんですけど、同じ食卓につく訳にはいかないらしく、ただいるだけなんですよ……。や、気まずい。

本当にお仕事としているだけなんですよね。当然には当然なんですが、私としては仲良くなりたいといいますか。同じ場所にいるんですから気まずい雰囲気のままでいるのも……。しかし、メイドさんに取り付く島もなし、といった感じで。

それに、メイドさんは入れ替わり立ち変わりするので名前も覚えられない。あとごめんなさい、外人さんの顔つて似たような顔ばかりで中々覚えられないんです……！

メルフィナさんとかアティラさんとかは、特徴ありまくりで覚えやすかつたんですよ。メイドさんは特徴あるようなことをしないので覚えづらいんです、と言い訳。

……はあ。なんだか悩んでばっかりです。

家族。そう家族です。家族……。

マビアに関しては、元々一人っ子だったので妹欲しいなー、と思つていたので問題ないです。ええ、問題なんてないです……多分。これから妹ができたことによつて、どうなつていくのか不安なんか抱いてないですよ！！　ええ！

今悩んでいるのは……元の世界の家族のことで。正直に言つておあひ、ほつとしている部分があるんですね。

両親のことは好きですよ。お父さんもお母さんも、大変だひつひ働きながら私のことを育めてくれて。家族で週末にしていても、電話が急にかかってきて仕事に行っちゃうなんてしょちゅうでしたし。寂しいとは常日頃思つていましたけど、私の為にやつてることなんだつて分かつてからは、一人で自分のことくらいできるよつてしたり、わがままを言わないように頑張つたり……。
なんてつたつて、私の為に両親は頑張つているんですからね！と、自惚れでみます。

……でも逆に考へると、私は両親の負担になつてゐることじやないですか。私がいなかつたら両親は今よりも楽に暮らせて、のびのびとできていたかもしれない。

私は、いなかつたほうが良かったのかも、つて思つたりして。

だから、ある意味、この世界に来たのは良かつたのかなつて思つてゐるんです。これで両親の負担になることはない。
良い事とは、分かつてはいるんですけど、けれども……。

でも、寂しいんです。普段から会える時間は少なくとも、会える

ことには会えた。今は会つことはできません。
負担になるのは嫌でしたけど、会えなくなるのは……辛いです。

うー、あれですね。当初のよつなドタバタしているのがいいです。
寂しさなんて感じるような暇ないですからねー。

困つたりはしますけど、マビアにはそういう意味で助かってます。

はあ、早くマビア帰つてしませんかね……。今は見回りに行つてゐんでしたっけ。

食事を終えて、ソファーでだらーっとする。ああ、太りそつ……。
そしてメルフィナさんに怒られるんでしょうな、この格好。

「淑女がそのような格好をして良いと思つておりますの……？
… そうでしたわね、貴方は淑女という柄ではありませんでしたもの
ね」とでも言われそうです。

あ、腹がたつてきました、私の妄想だとこうのに。もつちよつと
優しくしてくれたつていいと思つんですよ！

「ミヤ様、少々よひしにじょつか
「はつ、はい！？」 なんじょひー？」

メイドさんに呼ばれて飛び起きる。び、びっくりしました。メイ
ドさんって基本的に、決められた予定以外のことば話しかけてこな
いんです。だから何かあったのかなー、と。

「来て頂きたい」ところがあるのですが、
「え！？ い、いいですよ！ よこんで！」

あ、思わずメイドさんの言葉を遮つて言つてしまつた！ いえ、
その、まさかのメイドさんからのアクションだったので嬉しいんで
すよ！

これを期に仲良くなれないかなーと思いまして。思つてもみない
チャンスです！

茶髪の髪の毛をまとめてアップにしたメイドさんは、私の即答に
ちょっとびっくりしてから、綺麗に微笑んで私を部屋の外へ促した。
笑顔が艶やかでドキドキしてしまつたのは秘密です。

なにがあるのかは分かりませんが、仲良くなつてやります！

常日頃から勇者で在り続けようとしていた。周りから勇者として期待され、その期待に答えようと勇者といえるような人間であろうと心がけた。

皆の幸せを願い、悪を討つ。常に公正であり、正義の体現者であらなければならない。

そんな、物語の人間に私はならなくてはならなかつた。

物語は物語だ。私は所詮虚構の勇者である。どんなに創り上げても、本物の勇者に私はなれない。

なれないというのに、皆は私を勇者として祀り上げる。本当の私は、そんな人物でありはしないといつのに。

……本物の私は、どこへいくのだろうか。勇者ではない私は、どこにいるのだろうか。人間である私は、どこに。

勇者であるのならば、人間の私がどこかへと行つてしまつ方が良いのだろう。消えてしまえば、私は勇者になれる。それが最善であると分かつてているのに、どうしても私は私を捨てきれなかつた。

歴代の勇者は愛する者を見つけることなくこの世界から離れていかれた。周りは生涯の伴侶を見つけ、人生を終えるというのにだ。望まぬ好意を寄せられ続け、精神を蝕まれながら勇者として生きていく。

歴代の勇者は役割を果たしていったが、彼らが幸せであったとは言えないだろう。寄り添い分かち合える人は存在しないのだから。

勇者は、神から承った使命だ。こなすことは私の存在意義である。だから勇者であろうとした。

けれども私は、歴代の勇者が手に入れることのなかつた幸せを、手に入れたいと思つてしまつた。

ハルトムートという、一人の人間でありたい。勇者でない自分をなくしたくない。そう思つのは、罪なのだろうか。

それから私は召喚魔法の開発を決意し、数々の研究を重ねてきた。手つ取り早く完成させるために一人では行わず、様々な人々から意見や考えを聞きながら地道に一步一歩進めていく。

無駄だと、やらなくていいと何度も止められはしたが、私は止めるなどできなかつた。

皆が手に入れられる幸せを私も手にしては駄目なのだろうか。そんなことはないはずだ。私は人間で、羨ましがつたりもする。それが、分からぬのだろうか。

だから私は止めずに走り続けた。羨ましい 嫉妬という感情を抱きながら。

そして。

私はとうとう愛しき人を手に入れることができた。

……これほど、心が揺さぶられたことがあつただろうか。

彼女を見た瞬間、私の心は全て彼女に奪われた。いえ、私が捧げてしまつたようなものだ。

彼女の一挙一動に、動搖する自分がいる。彼女の声に、心を響かされる自分がいる。今まで一度も感じたことのない感動が、襲つてくる。

自分が創り上げた勇者というものを、壊していく。人間の私が浮き彫りになつていく。望みが、欲望が、溢れ出して止まらない。

彼女が、愛おしい。

しかし、同時に恐ろしくもあった。私が触れていい方なのか、と。私が接触する事により、彼女に何らかの悪影響を及ぼしてしまつのではないか。美しい彼女を、汚してしまつのではないか？

そう思いつつも、私は自らの欲を優先させてしまつ。止めようとしても、枷は必ず外れてしまうようになつていた。

召喚をした時点で、彼女の意志を無視したのだ。これ以上自身の願望の押し付けはしたくないと思つてているのに。

……彼女が、幸せであればいい。それだけで私はいいのだ。彼女は私に愛する心を教えてくれた。それだけで、それだけで……。

それだけであればいいのに、私は。

「ミヤがこませるビーチ」ですかあなたがどこかにミヤを隠し

たとでもこうのですかまさかミヤを独り占めにしようとした魂胆なのですか許しません許しませんそれだけは許しませんもつミヤは私の家族なのです家族である以上共に暮らすのは当然でしう心配するのも当然でしうわざとミヤを出して下さい私はミヤの家族なのですからうふふ家族私はミヤの家族家族ミヤは私の家族うふふふふふミヤだけが私の家族ミヤああミヤあなただけなのですさあミヤをミヤをミヤを…」

「……待つて下さいマビア。ミヤがいないとはどうのことですか」「そのままの意味ですが私はミヤの家族となりミヤは私の家族となつたのですミヤが私の姉となり私はミヤの妹となりました家族を持つことはこんなにも幸せなことだとは知りませんでしたああもしやこれはミヤが私に課した試練なのでしょうか家族という絆を確かめるためにミヤああミヤそのようなことをしなくても私の全ではミヤにあるとこうのにそれでも確かめずにいられないのですねうふふふふこうやって絆の確認をしあうともまた家族といふものなのですねええいいでしゅうやりますよミヤあなたの為なり…」

執務室に突如として現れたマビアだが、相変わらず話が通じない。話が段々と逸れていくのだ。聞きたい事があつても、聞き出せるのは極僅か。

普段であれば微量の情報から推測して物事を進めていくのだが、今回はミヤについて微量だけでは済まされない事態だ。なんどしてもミヤがいなくなってしまった事についての詳細を聞き出せなくてはならない。

ミヤの立場を安定させる為に作成している書類を、軽く纏めて鍵付きの机に付属している棚の中にしまつ。私以外の者に開けられぬよう、魔法もつける。様々な貴族の弱点や不正も乗っているので、見つけられてしまつては困るのだ。

後ろ盾のないミヤは、この世界で過ごす事は難しい。私やマビア、ロルシヤー工様がいるとはいっても、味方は圧倒的に少ない。

いくら私が魔王を倒した褒美として、己の望む者を妻にする権利を得たとしても、あわよくばと強大な権力を得ようとする者がいる。そのような者からミヤを守るのに、今の私は動いている。中々時間がとれず、ミヤに会えないのが難点ですが。

第一にミヤの為とやっていますが、将来私が治める国となる。脳は炙り出し消去しておかなければ。

……それよりもミヤ、貴女はマビアを家族としてしまったのですね。できるこことならば私がこちらでの最初の家族となりたかったのですが。

「試練ではありますん、マビア。そもそもミヤが何も言わずに何処かへいなくなることがあるのでしょうか。ミヤならば必ず伝言か書き置きを残すはずです。ミヤの部屋に、何かありませんでしたか？ミヤに伝言を頼まれた者、ミヤの部屋に待機している者はいませんでしたか？」

「私に話しかけようとする者などいません私に話しかけていいのはミヤと貴方だけですそれ以外はいらっしゃないのでミヤの部屋にいてもいいのはミヤだけ招からざる者はいませんミヤから私にあてた手紙があるとしたら永久保存ものですミヤが私に私にこの私にあてたのですからミヤ貴女の字はとても可愛らしくいたどりしくて微笑ましいという気持ちになれます私が教えてあげたい私にミヤへ字を教える役目を私に変更して下せりあ今すぐ！！」

部屋には誰もおらず、伝言を頼まれた者はいない。また、書き置きがあつたわけでもないという事は、何かがミヤにあつた。それしかないだろう。

そういえば最近、私に好意を持つ女性の動きが妙だったような気がする。なるだけミヤには既婚者の侍女をつけたのですが。

既婚者は私に対しても恋愛の情を持つことはない。仕事にプライド

を持つてやる者を選び、安心してミヤを任せたのですがビリビリ
となるのでしょうか。

何はともあれ、早急に動かなければ。

「それよりもミヤを探すほうが先です。マジマ、ミヤ付きの侍女を
全員ここへ連れてきて下さい、今すぐ」

恋焦がれた大事な人。貴女を誰かが何処かへやつたというのなら
ば、私は決して容赦などしません。

私の愛する人に手を出したのですから。

「聞いてるんですかあ～？ たまご、コーラの瓶の上せん

「羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹、羊が四匹、羊が五匹、羊が六匹、羊が七匹、羊が八匹？」
「…………」に羊はいませんよお～？ 幻覚でも見ちゃつてるんです
か～？」

だつてもうお休みの時間帯じやないですか!! 夜更かしになりますよ!? お肌の健康を思うといけない時間帯ですよ分かつてゐんですか!? 夜更かしは女の敵!

だからみなさんお家に帰つて寝ませんか。おやすみぐーぐーを推薦します！ そして私をこの豪華絢爛なお屋敷から私の部屋に帰して下さい！

朗らかに笑つてゐるリーリナさん、夜だといつのに神々しい照明、少しでも煌びやかに見せようと努力しているのが分かる、様々な階級の大勢の女性、ひろーいダンスホール……。

目が痛い頭が痛い視線が痛い殺意が痛い痛いたい
こんなことになっているんでしょうか。
なーんで

メイドさんと仲良くなれへー。と黙つてメイドさんひとりで行つ

たらこのザマですよ。いえ、ある意味分かつてはいたんですよ分かっては。

ハルトムートさんが私を好きな以上、私は世界中の女性から田の敵にされる存在ですからね！ 憎いったらありやしないヤツですし！ でもですね、やはり同性のお友達は欲しいんです。今の私、友達といつたらロルシャーハーくらいですから！

だからほいほいついていつたんですー。伝言を他のメイドさんにお願ひしたから大丈夫だろうとか、友達欲しさに憎まれているの忘れた私も悪いとは思いますけど！

ううう、同性だからこその恐ろしさを知つていい分、これからが怖くて怖くて……。

「こんなに人がいるんですけど、私が代表して言っちゃいますけど」、

「ああああはいはいはいはい分かつてはいます分かつてはます！！ ハルトムートさんから離れちっこいことですよね！？」

それ以外で私に何の用があるってんですか……。はつ！！ もしかして美肌を保つ為の禁断とされている秘訣を……なんて、嘘です嘘。ちよつとテンション上げたかっただけですってば。

またの名を現実逃避！ ……はい、自分でもおかしくなっているなあとは自覚しております。いつもでもしないとやつてらんない気がするんですよ。

「分かつてるならいいんですけど。まあ、ハルトムートさまが魅力的で離れがたいというのは分かるんですけど、本気じやないのにいられるのは～、わたしたちに失礼つていいますかあ～」

手をもじもじ体ゆらゆらせながらリーリナさんが話す。リーリナさんだからできる動作ですね……。

確かに、リーリナさんが言っていることは最もです。

私はまあとりあえずなるようになれる的思考ですし、ハルトムートさんを本気で好きな方々にとつては凄くふざけた奴なのは分かります。

でもハルトムートさんの気持ちを考えると、離れるのもどうなのがなー、と。

好きな人と離れてしまうのは辛いです。親と離れてしまった今だからこそ、よく分かるといいますか。

氣恥ずかしいことですけど、ハルトムートさんは私のことを好きでいてくれています。それを分かつていてるのに離れるのは、ハルトムートさんに対して酷なんじゃないですかね？

と思うんですけど……、どう解決しろっていうんですか。本気ではない私がハルトムートさんの側にいるのは世の女性から反感を買っていますし、かといって離れるとハルトムートさんに悪いですし……ちなみにハルトムートさんのこと好きかと言われたら、まあ、その、好きです。と言つても、恋とか愛とかの好きじゃなくて、友人的なものなんですね……。

いえ、いい人だとは分かつてているんです。分かつているんですけどなんかその、きっかけがない？ とでも言いましょうか……。ううつうつうつうその、『こによ』によ。

あああああもう、私にどうしろってんですか。そんな今選択を迫られても優柔不斷な私には決めがたいんですけれども。

「とにかく、あなたから離れてくれないといけないんですよ。そうでないと、ハルトムートさま納得してくださらないので。あれですよ、やつてくれないとこのなら、つぶつぶ、さようならつてことですね~」

「……つ、つまり、殺しちゃうぞってこと……です、よね。ななな

なななーんでマビアと同じく殺しに直結せるとか双子だからなんです、か……」

マビアのことを言つた瞬間周りの空気が凍り、リーリナさんの表情がなくなる。マビアについて触れちゃいけない雰囲気があつたのは分かつてたんですけど、こんなに禁忌なんですか……？

「わたしをあんな化け物と一緒にするのはやめてくれませんか。あんなやつ、マーシア家の恥なんですか？」

「そうですわ、あんな化け物とリーリナ様と一緒にしないでくれます？ あの化け物のせいだリーリナ様は……」

貴族であろう人が付け加えて話していく。周りの人も、貴族の人には同調して頷いていた。

マーシア家……、多分マビアとリーリナさんの苗字だ。今更知りました。

それにしても、化け物つて。ヤンデレがすぎているとは思いますが、悪い子では……悪い子ではないですよ。

「あの、家族なんですから化け物とか、そこまで言つのはどうかと思」

「わたしから全てを奪つていいくあんなやつわたしの家族なんかじゃないっ……！」

言葉の雷が走った。え、り、リーリナさんですか……？ 化けの皮というか、温厚な感じでいつていたのが剥がれてびっくりなんですがれども……。いくらなんでもマビアのことが嫌いすぎじゃないでしょうか。

そりやあ怖いところもありますけど……ありますけど……なにもそこまで邪険にしなくて……。

「……なんか分からないうつて感じですね。教えてあげますよ。
あいつがどんなやつか」

ゾッとする笑みを浮かべて、リーリナさんは語り始めた。

「ほん、と一つ咳払いをしてリーリナさんが話し始める。

「人は、必ず魔力を持っているって知っていますか～？」

「あ、はい勉強しました！　と、ひとつ頷いておく。

この世界で生まれ、命を持つ全てのモノは必ず魔力を持っている。なんで魔力があるかつて言いますと、ラムフォーラースでは体にある機能の一部なんだそうです。ある意味、体力がもう一個あるような感じだそうな。

因みに私に魔力はありません。ラムフォーラース生まれじゃないですかからね！　でも、魔法を使えないのは悲しい……。

魔力を持っているからといって絶対に魔法が使える訳じやなく、適性が必要で誰しも使える訳じやないんです。

だから魔法が使えない人はごろごろいる。つまり私は仲間外れじゃないってことです！

呪文を唱えるのは、自分の中の魔力を外に引っ張り出す為。料理は様々な手間をかけて、できあがりますよね？　その手間の部分にあたるのが呪文なんです。

マビアは手間をふつ飛ばして料理を作っちゃうので、天才に分類される。うーん……、なんか違和感が。マビア、奇人変人ヤンデレですし。

「わたしは～、その魔力が生まれ持つて少なすぎるんですよ～。折角魔法の名門とそれでいる家に生まれたのに～。それもこれも～、

あいつのせいなんですけどね～。あいつがわたしから魔力を奪つて
いつたんですから～」

「黒い。その笑みは黒いです。腹黒とかそういう方面じゃない
黒さで怖い……。

「でもなんでマビアのせいなんでしょうか。あれですか？ 兄
弟間によくある、「頭の賢わは全部兄が取つていってしまったから、
俺は頭が悪い」的な。

それだったら逆恨みにもほどがありますよ。マビア悪くない！
逆恨みよくなー！」

「本当にだつたら～、今のわたしは普通の子だつたんですよ～。それ
なりの幸せもらえて～、それなりに悲しんだりして～、そんな女
子になるはずだつたんですね～」

「……そんな仮定の話をされましても。もしも、 だつたら。そ
んなの今となつてはありえない話なんですから、言つてもどうしよ
うもないと思つんですね。

『もしも』 そうなつたとして、『もしも』 本当に言つたような事
になつているかなんて分かんないですしお。

私自身も仮定の話をしたりはしますけど、それとこれとは違うと
いいますか。根本的な仮定の話をされても困るつていうことです！

「なのに。あいつがいたからわたしはこんな風になつちやつたんで
す～。こんな風に話すこともなかつたと思つんですよ～。だつてえ、
実際はわたし馬鹿じやないんですよ～？」

「いえ、なんとなく分かつていました。計算高いといいますか、打
算しているような所が垣間見えてましたから～。只の天然ちゃんだ
とは思つてませんから～！」

でもそれを自分で言ひちやうのは駄目だと思ひます！

「みんなリーリナのこと、可愛がつてくれましたあ。最初は嬉しかったんですけど。でも、段々ライライしてきましたよね～。みんなリーリナのこと、可哀想つて言つんですね～。リーリナちゃんは可哀想。あんなやつと双子だなんて可哀想。トドメにですね～、あなやつと比べたらリーリナちゃんの方がよっぽどできた人間だ、つて言つてくるんです～」

にこやかに話しているのに、リーリナさんの瞳には涙が溜まつてきている。

……周りの人達はなんだか氣まずそうな雰囲気。リーリナさんが言つているようなこと、言つた覚えもあるんでしょうか。

「わたし、それが嫌だつたんですね～。でも、わたしがこうやって可愛くて可哀想な馬鹿でないと、みんなまつてくれないんですね～。もう疲れちゃつたんでぶちまけますけど」

わざわざ最後の台詞での温度差が激しすぎて背筋がヒヤッとした。化けの皮ど～ろか、中のえぐい肉まで見ちゃつた気分です…

溜まつていた涙が、一筋の跡を残しながら流れ落ちる。表情は氷のようなものに変わり、そのままの温度でリーリナさんは話を続けていく。

「結局わたしはあいつと比較されなくちゃいけないのかなと。比較されることでしかわたしの存在価値はないのかなと。あいつは他人で家族なんかじゃないのに。そう思つちゃつたんです。……できた人間？ 何を言つているんですかねえ？ 魔法の名門に生まれたのに魔法の使えないわたしなんて、全然できた人間じゃなくて出来損

ないなんですから。そうだと思いませんか？」「

酷く冷めた声が、辛そつだった。

「わたしから色んなものを奪っていくあいつが憎かつた。だから、わたしも奪つてやろうと思つたんです。あいつの好きな人、ハルトムートさま。でも、ハルトムートさま、すつごい素敵だつたんです。本気になつてしまつたんです。ハルトムートさまはあいつとわたしを比べたりなんかしない。リーリナのことを見てくれる。リーリナを見てくるんです。だから婚約者なんかいらぬし、あなたなんかにハルトムートさまは渡せないんですよ」

真剣な眼が、私を離さない。……本気で、ハルトムートさんのことが好きなのだと訴えてくる。

う、うわああああああ……。重い、重すぎますよこれ。こんな思いを持つていてる人が何人いるんですか……。

そんな人達相手に私頑張ろうとしてるんですか！？ む、無茶じやないですか……。

ううう、先が思いやられる、というかもう既に手遅れですかそうですか勘弁して下さい。

……ん？ 結局リーリナさんは、マビアと比較されることなく、自分自身を見てもらいたいって言つていろんですね？
まあその、なんと言いますか。

「やっぱり双子ですね。マビアとリーリナさん、似ています。二人とも自分のことを見て欲しくてたまらないんですから。やっぱり一番自分のことを分かつてくれるのは、自分という存在に一番近い人なんじゃないですか？ 一度話しあつたりどつですか……か……」

「誰が」

地獄の底から這い上がってきた声が私に突き刺さる。

ま、まさかー……、また、私、やつちゃつたとかです、かー……？

私は建国に携わった者の子孫として知られる、リアーズ家の長女として生まれました。

名前の一一番目には”ル”を賜り、歴史ある家の者として恥のないよう心がけ、常に誇りを持つて日々を生きているのです。

シュレイヴァーン家と懇意にできたのも、私がリアーズ家の娘だつたから。幼い頃から彼を知り、誰よりも彼を見つめきました。
彼が巫女様 ロルシャー工様によるラムフォ神からの御言葉により、勇者であると定められる前から、ずっと。

勇者になつた彼は、田覚ましい成長と活躍をあげていきました。元から素晴らしいお方になるだろうとは思つていたのです。

ですが勇者であると判明した途端、彼に注目が集まり沢山の陽の光が当たるようになりました。彼の為に様々なものが与えられ、更に彼の能力を高めようと最高の教育や贈り物が彼に与えられたのです。

彼の両親も自身の息子が勇者であつたことに大いに喜ばれ、惜しみなく彼を勇者として相応しい者に育て上げようとなさいました。彼はそんな大勢の人々から寄せられる期待に答えようと、日夜勉学や鍛錬を励み努力していました。

何事も一発で覚えてしまい、上手くこなしてしまつ彼だというのに、努力を惜しまない素晴らしい人でした。

私は勇者として立派にあるつとする彼を、支えていこうと思つたのです。

リアーズ家長女としても、彼の隣に立つに値する人としても、面

田の立つ女性としてあらうとしました。

彼の隣で、彼を支えていたい。……彼と、共にありたい。
ただその一心だけでした。

彼もまた、「共に国を良くしていきましょう」と言つて下さつて、
私は彼と共にいて良いのだと思つたのです。

けれども、彼は。彼はそんな私の思いを裏切つたのです。……い
え、裏切つたのとは違うのでしよう、彼にとつては。
彼は彼なりに思うことがあつて、召喚だなんて事をなそうとして
いるのでしょうか。裏切つたと思つているのは……、私の勝手な
のです。

そう、私の勝手。こうして傷ついているのも、私が勝手にやつて
いるだけ。勝手に傷ついているだけなのです……。

本当に、私は滑稽な女なのでしょう。報われることがないかもし
れない。それでも思い続ける私は愚かなのでしょう。

彼に好きな人が現れたのですから、諦めたほうが楽になれる。幸
せになれる。

分かつてているのです。分かつてているのです。それでも諦めること
ができない私は、愚か者なのです……。

ある宵のこと。突然彼が、……いえ、突然とは言えませんね。私
は来るだろうと思っておりました。彼が、ハルトムートが共を連れ
て私の家に訪ねてきたのです。

両親が迎えようとしたが、私に用事があつていらしているのは明白。お願いして、私が迎えました。

「……ハルトムート。よつこそこいらにしゃいました
「突然の訪問申し訳ありません。緊急事態が起きました。貴女に協力して頂きたいのです」

びことなく焦燥とした表情をしながら、に私を見つめるハルトムート。

……私が素直に協力するものだと思っているのですね、貴方は。私が今まで馬鹿みたいに貴方へ呪くしていたのは、全て貴方と共にいたいからだつたといいますのに。
それでも、私は……。

「あの娘のことなのでしょう、ハルトムート」

「ええ。ミヤがいなくなりました。どうやら大勢の女性が関わっているようなのですが、巧妙に隠されており、ミヤの居場所を早々に見つけることが叶いません。時間が惜しいのです。……貴女ならば、何か知っているのではないかと思いまして」

「私が、やつたとはお思いになりませんの？」

「……貴女が、ですか？」

「え、ええ。そうですわ」

普段からして、私がやつてていると思つても悪くはないはずなのです。いつも私はあの娘に対して、ひどくハツカたりをしていくのですから。

ハルトムートの心を、持つて行つてしまつて。その割には本人、その気がないというふざけた人なんですもの。

何年も思つてきた私より、たつた一瞬でハルトムートの心を奪つていつた娘が憎くなるのは当然だと思うのです。

ですからハツ当たりに關しては、私が悪いと思つことは少しもないと思いますの。

……けれど、今回私は私が悪い部分もあります。あの娘の居場所を知つておきながら、ハルトムートに知らせよつとしなかつたのですから。

ハルトムートがいらつしゃつた少々前のことです。ある一人の女が、私を訪ねてきました。

マーシア家に生まれながらにして、双子の妹に魔力を奪われたとされる哀れな女、リーリナ。

彼女は私に、あの娘の誘拐を持ちかけてきました。

今夜ならば、ハルトムートは忙しくあの娘と一緒にいることもない。忌まわしき魔女も、定期的に見回りをする時がある。その隙を突いてあの娘を誘拐して、脅すか殺してしまいましょう、と。

……甘美なる悪魔の囁きでした。あの娘がいなくなれば、ハルトムートは私を見てくれるかもしません。

私を、愛してくれる。ハルトムートと共に未来を築くことができる。本当にそうなれたのならば、なんて幸せなのでしょう。幻想的な未来予想が、リーリナの手を取れと訴えてくる。

けれども、私は。

私は、誇り高きリアーズ家の娘。

そのような愚行は、できない。

結局私は、誘いに乗ることなく今に至ります。女としては馬鹿な意地を持つたものだと思います。けれど、そんな意地よりも大切なものが私にはあつた。……それだけのことです。

だからといって、私が誘いを断つたことをハルトムートが知るはずもありません。

疑われても当然のはずであるといいますのに。

「ありえません。貴女が誇り高き方だと、私は分かっています」

美しい蒼の瞳を輝かせながら、はつきりと貴方は言い切る。
……何故、貴方はこうも簡単に否定して下さるのでしょうか。
何の疑いもなく、盲田ともいえる程に。

「……ですから、私は貴方の事が好きなのですわ」

私を分かつてくださる、貴方が。

「……すみません。その貴女の想いに、私は答えることはできない」「分かつておりますわ。……もつ、十一分に」

眼がじんわりと熱くなり、水を流そうとするのをぐつと堪える。
涙は女の武器。意図しないところで使うべきものではない。
一度しつかりと眼を閉じて、出ていこうとするのを完全に抑える。

……もう、とどめは刺された。

ゆつくりと瞳を開け、口を開け。
恋した人に、お別れを告げた。

「説明申し上げます、ハルトムート様。ミヤ様の行方を」

私はリアーズ家の娘、メルフィナ。王を支え、国を支え、礎となる者。

王となる貴方の為ならば、協力は惜しみません。

「殺す。殺す。殺します。あんなやつと似ているだなんて信じられない。耐えられない！」

頭を思いっきり振って否定するリーリナさん。
いや、そりゃあ双子ですから似ているに決まっているでしょうに……。違う場合もありますけど、貴方達双子にそれは当てはまりませんよ。

「ふざけないで、ふざけるな、許せない、許せない！……ふふ、ふふふふふ、ふふふふふふ、出番ですよー。わたしの可愛い兵士ちゃん」

リーリナさんの言葉を皮切りに、扉からいかにも魔術師的な格好をした女性の人達が出てくる。いや、嘘ですみません、実際に魔術師さんですね！

そして私に対する敵意バンバンなのが凄くよく分かります。なんという形相をしてるんですか。怖いんですけども……！

「炎で焼き切つてしまえば、行方不明扱いもできますよね？
だって遺体がないんですからあ。そしてハルトムート様にはこう言つておきますー。ミヤさんは他の男性と駆け落ちしましたあ、つて
「え、焼いたとしても骨残りますよね？」

「……残っちゃうんですかあ？ でも骨だけだつたら、もう分かりませんよねえ」

あ、それは確かにそうですね。骨だけだと、ここじやあ誰かなんて分かりませんし。ここにDNA鑑定とかあつたらびっくりですよ！ 土葬の文化らしいので、焼いた場合なんてそんな分かりませんよね。

それにハルトムートさん私が駆け落ちしたとしても、「そりミニヤが望んだのならば……」とかいつて納得しそう。うーん、それはそれで複雑ですなんか。

……って、駄目じゃない美夜！！ 今、正に！ 物凄くピンチじゃない！！ なんとかしないと焼かれちゃう！ 焼かれながら死ぬとか何それ怖い！ 魔術師さん方は呪文を唱え始めてますしいいいい……！！

心なしか、周りの人達もリーリナさんがやろうとしていることに戦慄し始めた。まさか田の前で殺人が起ころとは思っていなかつたようだ。

みなさん怖いですよね！？ ね！？ なら止めませんか！？

「ああああああの人を焼くとですね、とてつもない臭いを発するそ
うなんですよ！！ だから止めませんか！？」

「臭いのは嫌ですけど、それとこれとは別ですからあ

唇を僅かに尖らせながら、髪の毛をくるくる弄りつつ言つている。
な、なんか本当にどうでもいいって感じですね！ 余計に怖いんで
すけれども！

魔術師さん達の呪文も完成間近なのか、なんかエネルギー的な赤
い光がうようよと漂つていて。そして、言い切った瞬間。

魔術師さんの田の前に、大きな炎の塊が現れた。まあまあ距離が
離れているというのに、熱気が！ 热気が伝わってきます！

「ま、まさかそれをぶつけてくるとかそんなんじゃないです……よ

ね？」

「えー、もちろんそうじゃないですかー」

いやいやいや、そんな炎だつたら骨まで焼き切られる自信ありますから！ 骨さえ残らないとか悲しそぎます！

「というわけでー、やつちやつて下さこなあ。私の兵士ちやん

とてつもなくいい笑顔をしながらリーリナさんが命令して、炎が私の方へと向かってくる。

し、死ぬんですか。……死ぬのかあ。なんか、本当にあっけない人生でしたねえ……。でもまあめったにない経験もしましたし人生としては面白い方だつたんじゃないですかね？

とか、そうやって私は遠い何処かに旅立つていたんですけども。目下に迫っていた炎が突然青い炎に飲み込まれたかと思うと、魔術師の人達が強い衝撃を受けたのかのように一度体をビクリとさせて、そのまま床に倒れていきました。

……え、え、何事？

「ま、まさか、上位破棄！？」

リーリナさんは青い顔をしながらそう叫んだ。じょ、上位破棄？ まだよく魔法のことは勉強していないのでよく分からないんですけども。

多分、今使つていた魔法より強い魔法で何かしらしたつてことなんでしょうが。やっぱり分かりません！

使えませんけど魔法の勉強もしなくちゃいけませんね、これは。ちなみに青い炎は私を中心としてゆっくり旋回しています。この青い炎はなんなんでしょうか。さつきの事を考へると、私を守ってくれたんですかね？

青いつていうことはすぐ熱い炎のはずなんですけど……、何故か赤いの炎とは違い熱気を感じません。

氷の炎とか……って、それはいくらここがファンタジー世界だとしてもないですよねー。確かめてみたいんですけど、どうひらてしろ火傷確定なのでしませんよ！

じーっと青い炎を見ていると、後ろにある恐らく正面玄関に続いている扉の方から、木がバリバリとぶち壊れる音がした。

音につられて後ろへ向くと、巨大なハンマーでぶん殴られたかのように正面扉がぶち壊される。ちよ、木くずが飛び散つて危なすぎます！！

扉近くにいた人達が被害を被つてキヤー キヤー言つてますから！

！ それ以外の人も扉がぶち壊されたことにキヤー キヤー言つてしまたけど。

埃やら何やらが舞い上がりよく見えない中を裂くように、2つの人影が飛び出していく。

前にいたのは相変わらずの凶悪な笑みを浮かべたマビア。文字通り飛んできたのか宙に浮いています。

後ろには、そのマビアの腕を握つて一緒に飛んできたであろう、真剣な表情をしたハルトムートさんがいた。今はもう着地して、腕も握つていない。……風に煽られて乱れた髪が色氣を醸しだします。エロい！

でもなんで、いえ、なんでってわけじゃないんですけど、うーん、どうしてマビアの腕握つてたんでしょうか。いや、多分突つ込んでいくマビアに便乗する為にやつたんじゃないのかなーとは思つんですけど。

なんだなんでしょう。ちょーっとジロラシー感じてしまつような？ 気が、する、ような？ いや、いや、まさか、ねえ。ないない。ないですよ。

.....ないですか！

えつほんじつほんえつほん!! まあまあそれはさておき。そんなことよりも今の状況が大切ですからね！ ね！

と言つても今現在現実逃避がしたいです。させて下さい切実に。私がいやいやまつさかーとなつてゐる内に、マビアとリーリナさんによるそれはもう盛大な姉妹喧嘩が始まつていたのです……。

「ミヤをあのような炎で焼こりつとするなど頭が狂つてゐるのですね私の『蒼の焰』で簡単に破棄出来るというのにああ可哀想に頭が悪いミヤの魅力に気がつくことができないのですね哀れな奴そもそものよつた低俗な魔法を使う辺り高が知れていますか間違えました馬鹿です大馬鹿です大馬鹿者ですミヤこそこの世で一番価値のあるお方だといふにそしてミヤに相応しいのは彼だけいくらどうこうしようが全て無駄なのですミヤには彼が彼はミヤが唯一なのですから無駄に足搔いても無駄であることに変わりないですよ馬鹿が」

「あなたなんかに言われたくないんですけど。わたしのモノを散々奪つておいてよくもそんなことが言えますよね。魔力は全部あなたが奪つていつて私の幸せを奪おうとするんですから。今だつてそうです。折角私が幸せへ道を掘もうとしているのに邪魔をして。何がしたいんですか？ そんなにわたしの邪魔をしたいんですか？ だとしたらただでさえ駄目だといふのに最低最悪な人ですね。あーあ、こんな人がわたしの双子の妹だなんて信じられません。本当にあなたなんか生まれなければよかつたのに」

「あれ私の双子の姉だつた人ではありませんかこれはどうもどうも

二人とも黒い顔しながら向き合つてぐちぐちチクチク言い合つて
います。

……あ、あのマビア。本筋からずれていってますからね？

どうせかこんな大勢いる中でそんな」と呟はないで下さった。……
は、恥ずかしい。あ、でも、未だにうようよしている青い炎で守つ
てくれたのマビアなんですね！ 後でお礼を言わせて下さい。後で。

「あ、あなたなんかに愛されるだなんてよっぽどおかしな人なんでしょうな。そんな人、ハルトムートさまに相応しくないんですから。いきなり出てきてハルトムートさまの愛を受け取ろうとするだなんて、本当に信じられない。今までわたし達が頑張ってきたのはなんだつたんですか。わたしたちの努力はどこに行くというんですか。わたしたちの愛の方がよっぽど大きいんですから。その人以外だつたらまだ納得いきます。けれどあの人だけは許せない。事態に向き合おうとしない人なんて最低ですから！」

私を殺すような視線でリーリナさんが睨んでくる。う、心が痛い。
いや、結構こちらに来てから1ヶ月くらいたつてますけど、未だに
夢見心地といいますか……。

いまいち実感が湧いていないんですね。現実には起じてるの
は理解しているんですよ？ 理解してるんですけど……、追いつか
ない、みたいな？

うーん、これは自分自身でも分かつてはいるんですよ。でもどうしていいのかは分からぬんですね。どーしたものですかねえ。と考え込みたいところですが！ 今はそんな状況じゃないんですつてば。なんで姉妹喧嘩から私についてに移行してるんですか。：

：ある意味では主題なんですかね？

最終的にマビアは顔をこちらに向けて愛を叫んできた。

そこまで過信されるのは困るけど、なんかマビアが感動するような事を言っています！ マビアったら少し見ないうちに立派な子になつて……！ お姉ちゃん嬉しいわ！ とか言つてみます。

いえいえ本当にまさかこんなことを言うとは思つていなかつたんですよ。何があつたというのマビア。それとも元からなのマビア。私が感動していると、我慢ならないといった様子のリーリナさん

が甲高く叫び始めた。

「なんなの、なんなのよ、やうやつて勝手に、勝手に愛だとか何だとか言つて、ふざけないでよつー。わたしは? わたしはどうなるの? わたしは愛されないの? ずっとずっと可哀想可哀想言われて、……それで終わり? そんなの、そんなの嫌、絶対に嫌! ……わたしも愛されたい、愛されたいつ! それなのにどうしていきなり出てきたあなたが愛を奪い去つていくの! ? あなたなんか愛される資格なんてないのにつー! 」

えーっと、資格云々はリーリナさんか決める」とではないですよよよのよ。でもそこまで言わると流石に傷つくんですけど……。

「あなたなんか、あなたなんか来なればよかつたのにつー……」

「うわ、ジモつー一言来ました。ついでにマビアの怒りが一気に最高潮になっちゃつてますし。禍々しいオーラみたいのがマビアの周りに漂っています。

来なければ良かつた、ですか。ハツ当たりなんでしょうけど、それなりに大変で色々あつたけれども楽しくやつていた身としては、……ちよつときついです。

リーリナさんの口が開いて、また何かを言おうとしているのが見える。あーっと、もうこれ以上は勘弁してトセー……。

「 静肅に。これ以上の発言は許しません」

え? ハルトムート、さん?

有無を言わせないよう命令した後、一步一歩踏みしめるようにハルトムートさんはこっちに歩いてくる。リーリナさんも含めた女人達は、ハルトムートさんの言葉が聞いたのか喋るどころか一ミリも動かない。マビアはマビアで、ハルトムートさんの方を見たかと思うとひとつ頷いて、怒りを収めていた。

ま、まさか、あの温厚で優しいハルトムートさんがあんなことを言つだなんて……。といつかこんな風に怒らない人だと思つていました。

でも、今のハルトムートさんは何もかも寄せ付けない雰囲気が漂つてます。優しい爽やか系イケメンから氷の独裁王子様へ変わつてしましました。すごく意外です。こんな一面もあつたんですね。

勇者様をやつていたくらいですしハルトムートさんにそういうつたモノがあつても、よく考えたら当然といえばそんなんですけれども。そうこうしている内に、ハルトムートさんが私の近くに迫りついてしまいました。冷ややかな雰囲気なので、ちょっと、いえ、かなり怖いです。

「……ミヤ、お怪我はありませんか」

冷たい表情になつっていたのが融けて笑顔になり、柔らかな声色で私に訪ねてくる。

あ、いつもの優しいハルトムートさんです！ ホッとしましたよー。冷たい態度のまま接されたら、ただでさえ落ちているのに更に落ち込んじゃいます。

すぐさま返事をしようとしたんですけど、そりこねばそれも喋つ

ては黙りだつて言つてましたよね！？ お、お口チャーック！！
いつまでも話そつとしない私に、怪訝な表情をしたハルトムート
さん。くつ、こうこう顔も様になるんだから、これだから美形つて
やつは……！ って、なに変な嫉妬しているんでしょうか。

「もしかして私の発言が原因ですか？ それならばいいのです。話
しても大丈夫ですよ」

「あ、はい！ 大丈夫ですよ、ハルトムートさん。肉体的にも精神
的にもピンピンします！」

セツキのリーリナさんから言葉はきつかつたんですけども、今はも
う回復しました！

問題があるとすれば早い所寝ておかないといけない点ですかね。
夜更かしはお肌の天敵ですから。

「そう、ですか。それならばよいのです」

何処か腑に落ちないような顔のまま、ハルトムートさんは私に向
いていた体の向きをそらした。

ん？ 何か不味い発言でもしましたっけ？ 当たり障りのないも
のだつたと思うんですけど……。引っかかつたのは一体なんでしょ
うか。

「さて。貴方は一体何をしようとしていたのですか」

再び氷の独裁王子様が降臨なさりました。美しく光る蒼の瞳が逆
に恐ろしい。

滑るようにハルトムートさんは周りの人達を見ていく。見られた
人は、恐ろしさに体を竦めていった。

好きな人が怒つたらそりや怖いですよね……。これは怖すぎま

すよ、トラウマものですよ。

「ミヤは私の婚約者です。それを分かつた上で貴女方はミヤを誘拐したのですよね」

「そつ、そんな誘拐だなんて！ 合意の上でそいつは来たんですね！？」

とつさに町民らしき人が声をあげた。お、仰る通りドーンぞいます……。まぬけですねまぬけ！ 警戒心が足らなさ過ぎでしたよね！ 少しは疑えど。常に女性からは敵意を向かれていくと思しなさい、美夜！

「喋ることを許可した覚えはありません」

ハルトムートさんが喋った人を視線で射貫く。厳しい視線を送られた人はもう涙目になっていた。

「怖い、怖い。ハルトムートさん本当に怖い。別人かつて疑つてしまふくらい怖いんすけれども……！」

やっぱり普段怒らない人を怒らせると大変ということが証明されました、やつたね！ とか言ってられないです。

「今のミヤは私の保護下にあるのです、私に許可をとらず無断で連れ去るのは立派な誘拐になります」

つまり私が伝言頼もうが、直接ハルトムートさんに許可をとらないと結局駄目だつたつていうことですかね？ う、うわあ、だつたら私最悪な子じゃないですか！

伝言だけじゃ駄目なんですね。ほ、本当に私駄目な子だ。知らない内に何処かに行かれたら、そりや心配します。

今まで勉強詰めで外に出なかつたから分からなかつたのもありま

すけど、私はもう少し自分の置かれた状況を見直さないと駄目ですね……。

「今一度、己の罪を自覚しなさい。このようなことをして、私が貴女方に目を向けると思っているのですか」

それは、ないですよね。ハルトムートさん王子様ですし、勇者様でもあつたんですから。まあ、元々の性格からして許せる行為じゃないでしょうし。

あ、あー……。何人かの人泣き出してしまいました。うーん、そうまでしてもハルトムートさんが欲しかったんですね。許せるかつて言われたら、う、『じょじょ』ですけど、気持ちは分からぬでもないといいますか。

……どんなことをしてまでも手に入れたいものって、ありますから。

「それに、……例えミヤがいなくなつたとしても、私が貴女方に振り向くことはありません」

僅かに眼を伏せながら、寂しそうにハルトムートさんが呟く。

『絶対ハーレム』の呪いがありますからね。呪いがあることを理解されないのは、『じゅうじゅう』ことに繋がつてしまつものなんですか……。

なんだか、ますますハルトムートさんが不憫に思えてきました……。が、頑張つて下さいハルトムートさん、未来はありますから! わ、私も幸せになれるよう手伝いますよ!

「リーリナ・マーシア以外、この場から去るよつ」。外に兵士が待機しているはずです。兵士の指示に従いなさい

しばらくはみんな動かなかつた。ハルトムートさんに言われた言葉がかなりショックだつたのだろう。

いつまでもやって来ないのにしびれを切らしたのか、何人かの兵士がやつてきてハルトムートさんとアイコンタクトをとつてから、女人達を外に出るよう促した。

泣き崩れてしまつて中々出れない人もいたけれども、皆さん兵士の指示に従つて出て行く。

こうして残つたのは私、ハルトムートさん、マビア。そして、俯いていて顔を上げようとしないリーリナさんだつた。

「やつぱり

肩を震わせて、ほそりとリーリナさんが咳く。声は、掠れていた。

「ほら、こうやって何をしても成功しない。何をしたって幸せになれない。何をしたって愛されることなんかないつ

そそそそういう努力はいらないですから、いらないですからねマニア！

「あなたはそうやって自分一人で幸せに浸つてゐるだけでしょー! ? 馬鹿みたい。私はそんな独りよがりな幸せはいらない。私が欲しいのはあたえられる幸せなの! 」

リーリナさんは、ありつたけの憎しみが込められた顔でマビアを睨んでいる。マビア素知らぬ顔だ。

「わ、我僕な人ですね。マビアの努力が足りないという言葉も、あながら間違いじゃないですよ、これは。悲劇のヒロインぶっている、とでもいいますか。

自分から何かしようとしている、事態がどうにかなるわけじゃないです」

じと皿になつていると、ハルトムートさんがため息一つついてから話し始めました。

「貴女は忘れているようですね。貴女自身を愛している人がいるという事を」

「そんな人、いません。いたとしても可哀想だからってだけです。ああ可哀想なリーリナさん。救つてあげたい。……そんなものはいらないんですよ」

「本当にやう言えるのでしょうか？」

絶対的自信をもつた声でハルトムートさんは言つた。……なんで私がドキリとしているんでしょう。なんかの想いがこもつてきましたよね、今。

そのままハルトムートさんは、入り口の方を向いて呼びかける。

「レスター将軍、いらっしゃいますか？ こちらに来て頂きたいのです」

扉がぶち壊されて外が見えるようになつており、そこから外に立つている人が見える。その立っていた人がハルトムートさんに呼びかけられて、私達の方へやつてきた。最初は歩いていく内にホールの照明に照らされて、はつきりとした姿が見えていく。

「おおおお、ハルトムートさんはまた違ったイケメンですね

！ 茶色の短髪に日本刀のごとき目付きでブラウンの瞳、すつきりした鼻立ちで引き締まつた唇。体はがつしりとしていて、体当たりした程度じゃびくともしなそうです。藍色の適度に装飾された軍服がこれまた似合う人ですねっ！

数十年経つたらきっと、ダンディになるんぢやないでしょ
うか。素敵つ。あ、いえ、今も十分かつこいいんですけれども。

「 というか、この人がレスターさんなんですか。時々名前を聞いてはいたんですよ。国の保有する軍隊の総指揮を取られている方らしいです。実際見ると貫禄がありますね……。でも25歳らしいんですよ、若い !」

「……」に。ハルトムート様、俺にそのような態度でなくていいのですよ

レスターさんがハルトムートさんに隣に来た。ハルトムートさんより少し背が高い。

「…人に笑いあ…して…あ、何気にハルトムートさん
が呼び捨てにしています！ ええと、霧岡気からしてお友達でもあ
るんでしょうか。

「一応職務中ですよ、ハルトムート様」

「そういうことにしておきましょう。レスター。かねてからの願いが、叶う時が来ましたよ」

「…………ですか？」

レスターさんは気まずそうな表情をして、視線を横へそらしている。そんなレスターさんをハルトムートさんはじつと見つめている

どういう図ですか

やがてハルトムートさんの視線に耐えられなくなつたのか、大き

く息を吐いてから鋭い瞳でリーリナさんを見た。

「リーリナ」

「何をしに来たんですか。爵位が欲しくて私と婚約をすすめたあなたが」

「……えつと？ もしかしてリーリナさんの婚約者って、レスターさんなんですか？」

「な、なんて贅沢な！ レスターさんもかつこいい人なのに！ いや、人の好みがあるので、ひとえにそつとは言えないんですけど、でもやつぱり、ねえ。」

それに、レスターさんが爵位という地位欲しさに結婚するような人には見えません。逆にリーリナさんにはもつたいない人だと思うんですね。

リーリナさんの攻撃をもうともせず、レスターさんは話を続ける。

「確かに俺は平民出身であるし、リーリナがそつ思つのも当然だ。だが何度も言つように、俺がリーリナと結婚したい理由はそんなものではない。俺がリーリナを愛しているから結婚したいんだ」

「嘘。どうせ可哀想だからでしょ。愛してるだなんて信じられない」

「こんなに率直な愛の言葉を言つているのに、すつぱりと切つてしまふだなんて……！」

「私だつたらイチ口ですね。あ、ここに来た時のハルトムートさんからの言葉は無効です。だつて唐突すぎでしたから！ でもどうしてこんなにツンケンしているんでしょうか、リーリナさん。……はつ！ 思い立つたら即質問！」

「あの、リーリナさん。そんな風に全部疑つてばかりだと疲れません？」

「疲れる？」

何を言っているの？ という具合の表情をしている。え、疲れませんか？ ずーっと眉間にしわ寄せでうんうん唸つて自分にじつて辛いことばかりつて、疲れますよねえ。

シンケンしているのだつて、あつと疲れているからですよー。多分。

「そう、私、……疲れてる、疲れてるんですね。あは、はははは……馬鹿、みたい。こんなことに気がつかないなんて」

下に視線を落としながら喋るリーリナさんの顔は、今までの憑き物が全部落ちたかのようなものだった。あのピリピリとしたものはもう見当たらない。

一度両手で顔を覆つて深呼吸したかと思ひと、互いに手のひらをどかしてレスターさんに向き合つた。

「レスター様。今日は、じめんなさい。けれど、また、また今度に
お話をしませんか」

……ああ、勿論だ」

レスターさんが晴れやかな笑顔を見せた。花が舞つてゐんじゃないかつてくらい幸せそうです。

んん、よく分からぬけれども……、一件落着なんですかね？
話が勝手に進んでいく……。

レスターさんはリーリナさんに近づいて腰に手を回し、ハルトムートさんに声をかけた。

「申し訳ありません、ハルトムート様。俺達はこれで」

「ええ。ゆづくつ話して貰って下さい。おつて連絡します」

レスターさんは一礼して、リーリナさんと共に去っていました。
それにもしてもレスターさん、幸せ全開過ぎてキャラ崩壊しかけて
ませんでしたか？まだレスターさんのことよくは知りませんけれど、第一印象がことく崩されましたよ。

「ミヤ、私達も帰りましょう

ぼーっと眺めたままだった私に声がかけられた。
あ、そうですね！早く帰つて寝ないとお肌が！！お肌が！！
さつひと帰つちやいまじょう！
でも寝る前に、ハルトムートさんとお話しないといけませんね。
それまで頑張るのよ、私！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9166t/>

このハーレム男がっ！！！

2011年11月20日16時58分発行